

異端戦国史の最高傑作・完全復刻！

信長殺し、

光秀ではない

八切止夫

信長襲撃犯は
他にいる！

〈八切史観〉の 金字塔

伝説の歴史作家が遺した異端戦国史の代表作

解説／井沢元彦 作家案内／若狭邦男

星海社

209



SEIKAISHA
SHINSHO

異端戦国史の最高傑作・完全復刻！

信長殺し、光秀ではない

八切止夫

本書は『信長殺し光秀ではない』（日本シエル出版、1981年・新装版）を底本として、再編集して出版したものです。

本書の中には現在では人権上の見知から不適切と思われる表現がありますが、執筆された時代状況や著者が故人であることから原文のままにしています。

目次

解説 正史は必ずしも真実ではない 井沢元彦 6

信長殺し、光秀ではない

てきは、本能寺 14

森蘭丸は美少年か 140

誤解 マカオ

青い実 利用

想念 虚実

虚像 目的

二君 ブロ

デモ 避難

疑惑

光秀にはアリバイがある 83

真実は雲なのか 191

何処 火薬

暗殺 贗作
デフォルメ 分析

巨艦 奇怪

講談 原文

彦左 旗印

信長は腹を切らない

236

合戦 当代記

言経記 タワイ

会報 剽窃

筒井記 細川記

天正記

ああ忠臣・明智光秀

361

勝負 好色

馳走 母の名は

殉忠

犯人はあなた、なのか

409

買物 降嫁

自殺 犯人

春日局 安土城

火屋 女性

殺し屋はこれだ

297

レース 茶湯

胡魔 縫殿助

ゲンヤ 犯人

大友記

作家案内 復活の八切止夫 若狭邦男

474

正史は必ずしも真実ではない

井沢元彦

八切止夫は自分の書いたものを「野史^{やし}」と称していた。民間で編纂^{へんさん}した歴史書のことです。外史ともいう。頼山陽の「日本外史」もそれである。しかし一般には歴史小説家と呼ばれていた。「信長殺し、光秀ではない」「上杉謙信は女だった」など「八切意外史」の一連の著作は、小説仕立ての作品が多く論文とは言えない。しかし純然たる小説はフィクションで歴史はノンフィクションだから、実はこれは一種の悪口なのである。「八切の書くものは荒唐無稽な作り話で歴史上の事実ではない」という悪意が込められた評価である。もちろんそうではなく、その主張は独特の歴史分析に基づくもので作り話などではない。実はこうした悪意の背景には日本歴史学界に所属するプロの歴史学者たちがいた。彼らにとつての史実とは確かな史料で確かめられるものであり、それがなければ逆にどんなに確実に推理できることでも絶対に否定する。それが科学的態度だと彼らは思い込んでいた。いや、今でもそうかもしれない。といっても抽象的でなかなかわかりにくいだろうから、ここに別の実例を挙げる。次の文章を読んでいただきたい。

太平記において宋学の影響があるかないかということについては、かつて多少論議された。証拠がないともいわれたが、これはやや愚論というべく、証拠といえば太平記そのものが証拠なのである。

さらに太平記に登場する最も重要な人物は後醍醐天皇だが、この後醍醐が宋学の書を読んだかどうかということについても専門家の世界に議論が多い。証拠がないといわれる。しかしながら、これは慎重でありすぎる考え方であろう。後醍醐天皇の行動、生涯そのものが宋学イデオロギー（大義名分論・正閏論^{せいじゅん}）でつらぬかれており、これまたそれそのものが根拠なのである。

いったいその当時、宋学の書物がそれほど多く伝来されていたか、という疑問も在来があるが、しかしながらこれも慎重でありすぎる態度であり、証拠といえば時代そのものが巨大な状況証拠なのである。

「太平記とその影響」〔司馬遼太郎が考えたこと〕新潮社刊に所収）

これは作家司馬遼太郎が昭和46年（1971）に古典文学全集の太平記の解説として書いた文章である。司馬遼太郎ファンならなんとなく違和感を覚える文章ではないだろうか、その違和感は彼にしては「しつこい」、関西弁で言うなら「ねちこい」というものであるはず

だ。同じ主張を何度も繰り返している。ではその主張とは何か。要するに冒頭にあるように「古典太平記に宋学つまり朱子学の影響があるかどうか」について、証拠がないと強力に主張していた人々がいたがそれはおかしいということである。

この人々は太平記の時代を分析し後醍醐天皇や楠木正成がどのような生涯を送ったか詳しく知っているはずである。それは朱子学というイデオロギーの信奉者としての生涯だ。誰が見てもそうなのに、専門家の世界つまり歴史学者の世界では「証拠がない」という言い方でこの明白な事実を否定してきたのである。だからこそ司馬遼太郎は（内心は相当腹を立てていたと思う）こうした考えは「愚論」であり「慎重でありすぎる考え方」であり「慎重でありすぎる態度だ」と3度も揶揄しているのだ。私ならもっと直截に関西弁で「こいつらはア○だ」と言ってしまうところだが、さすがに司馬遼太郎は節度がある。

これを現代ロシア史にたとえてみようか。ある運動家が、近世のロシアで労働運動に励み皇帝制を打倒しようとして虐殺された、としよう。その行動から見ればそれは共產主義革命を目指していたことに間違いないのだが、どこかの国の歴史学者は「証拠」つまり「彼が共產主義者であったと同時に代の誰かが書いた史料」あるいは本人が「オレは共產主義者だ」と書いた日記がない限りそうした事実を認めようとしないのである。そういう専門家がいたら、あなたでも「バカじゃないの」って言うだろう。それと同じことである。

かつてはこういう人間が、いやひょっとしたら今でも日本歴史学という学問の世界を支配

している。私も学会の外で歴史を書いている人間だからその点では八切と同じなのだが、二十数年前古代史を書いていたとき歴史学者っておかしいと思ったのは、彼らが日本書紀を「正史」だとし最も信頼できる記録だと考えていたことである。正史と言うのは「野史」「外史」の反対語であって国家あるいは官僚が編纂した歴史と言う意味であり、その意味で日本書紀を正史と見るのは間違っていないが、問題はそれを正確な歴史だと断定してしまうことである。

正史とは正しい歴史と言う意味ではない。そんなことは少しばかり人間界の常識を働かせればわかることで、たとえば日本書紀はその少し前に起こった壬申の乱の勝者である天武天皇が息子の舍人親王^{とねり}を編集長にして編纂させたものだ。どう考えても天武天皇の悪行については書かれているはずがない。だから私はその前提において天武天皇の「悪行」を「逆説の日本史」に書いたのだが、当時の学会の反応は一言で言えば「証拠がない」であった。古代において情報は一元的に管理されておりマスコミも出版もない。そんな時代に証拠が残るはずがない。それが人類の常識のはずなのだが、彼らにはそういう常識がなかったということだ。それも滑稽^{こっけい}なことに歴史学界の大御所と言われる人間ほどそうだった。なぜ滑稽かと言えば彼らは若い頃に大日本帝国がしきりに大本営発表をしていたことを知っていたはずだからだ。大本営発表というのは一言で言えば国家が国民を操るために自分にとって不利な情報は隠すということで、それを実体験しているはずの彼らが「日本書紀は正確な歴史であり推

理などで否定してはならない」などと主張するのだから、私がこうした人々をどう思ったかは繰り返して書くまでもないだろう。

ただ問題はそういう人々が日本の歴史研究を公式には支配していたということである。彼らは自分たちだけで独占している学会の研究のみが正しく、それ以外の世界で語られる歴史を雑音として無視する。たとえば私の知る限り、火縄銃という武器を操るためには黒色火薬の原料となる硝石しょうせき（硝酸カリウム）が絶対に必要で、それを得るために戦国大名は様々な行動に出たという歴史的事実を最初に大々的に指摘したのは八切止夫である。たとえば九州の大名が争ってキリシタンに入信したのも、その見返りに日本人を奴隷として海外に「輸出」したのも、当時国産不可能で海外輸入に頼るしかなかった硝石欲しさの行動である、などということだ。ところが日本歴史学界はそういう功績を無視する。もちろんそれが雑音だからだ。しかしそのうち雑音の方が正しいと思ったときにどうするか、その考え方をこっそり取り入れるのである。他の世界ではこれは「パクリ」「盗用」などとして非難されるが、日本歴史学界ではそうならない。なぜなら八切はその主張を学術論文として書いていないので、論文のアイデアをそのまま盗めば盗用になるが、そうした主張を「取り入れる」ことは盗用にならないと彼らは考えるからである。そうした場合過去の論文を徹底的に精査し、少しでも八切の主張に近いことを語っているものがあればそれを根拠とし、「そもそもこうした考え方は歴史研究で定評のある八切止夫氏の主張に基づく」などとは絶対に書かない。私なら少な

くとも礼儀としてその一文を入れるのだが。

そもそも日本史という文化は日本人の共有財産である。学会の独占物ではない。それなのに学術論文の主張しか認めないというのは文化の私物化ともいうべき行為なのだが、彼らはそのことにも気がついていない。これも実例を挙げよう。彼らが作った時代区分、飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、安土桃山時代、江戸時代には大きな問題がある。飛鳥時代の問題については紙数が足りないものでここでは触れない。興味のある方は拙著「日本史真髓」(小学館刊)を読んでいただくか、手っ取り早くYouTubeで「井沢元彦の逆説チャンネル」の動画「飛鳥時代はインチキ」を見ていただくのが一番いいかもしれない。話を戻すと、安土桃山時代というのは実に不正確な言い方なのである。これはその時代その時代で日本を実質的に仕切っていた政権の所在地を基にした時代区分である。だから奈良、平安(京都)、鎌倉、室町、安土までは問題ない。問題は桃山だ。これは安土と江戸の間だから桃山は明らかに豊臣秀吉政権の時代のことなのだが、実はこの時代に桃山という地名は存在しなかった。それに豊臣秀吉が政権を置いたのは大坂(大阪)か伏見であって大坂が中心だったから、この時代は誰がどう考えても安土大坂時代と呼ぶべきなのである。なぜこんなことになってしまったかと言えば、この時代の美術を桃山美術と呼んだために、どこかの大御所がうっかりと安土桃山時代という名前にしてしまったのだろう。明らかなミスである。だから私は日本史の真実に基づいてこの時代を安土大坂時代と呼べと十数年前から主張している。

しかし彼らは決して改めない、最近では「織^{しよくほう}豊（織田豊臣）政権の時代」などと言っている。それならば他の時代も室町時代は足利政権、江戸時代は徳川政権の時代と呼ばなければ整合性がないはずだが、そういうことは決してしない。おわかりだろう、ごまかしているのだ。なぜそんなごまかしをするのかと言えば、「素人」の指摘で過ちを認めれば彼らの沽^{こけん}券に関わると思っているのだろう。日本歴史学界の排他的な独善性は今も続いているのである。

八切止夫はこうした現実と戦い続けた。そういう意味では私にとっても大先輩である。教えられたことも多い。その点については大変感謝している。もちろんその所論すべてに賛成というわけではなく、たとえば本能寺の変の捉え方については私は別の考え方を持っているし、上杉謙信女人説についてもかつては懐疑的だった。最近はそうでもない。これについては人気漫画家の東村アキコがこのテーマで「雪花の虎」という作品を完成したことを付記しておこう。

（文中敬称略）

信長殺し、光秀ではない

てきは、本能寺

誤解

天正十年六月二日。おれは、まだぐっすり眠^{ねむ}って居るところを、

「ご謀叛にござりまする」と起こされた。

「この本能寺へ……して、何奴が押しかけて来たぞ」

「はい、白紙の四手^{しで}しないの馬じるし。紋は桔梗^{ききょう}……明智惟任^{これとうひゆうがのかみ}日向守光秀^{みつひで}と見うけます」

小姓薄田余五郎が、うわずった声で告げた。

「そうか。表御堂^{みどう}の番衆をあつめろ」

はね起きざま、おれは言いつけた。表御殿の広縁へとび出したが、空は桃色で、まだ薄暗かった。「調度もて」と、おれは四足の塗籠^{ぬりごめ}剛弓を取りよせ、塀がないから四方より迫って来る敵に、矢つぎ早やに防ぎ矢をくれた。だが、小姓近習に厩仲間まで加えても、百にもたり

ぬ小勢。

やがて、敵影が築地を踏み越え、眼の前まで出てきた。

弓弦が、上の大鳥打あたりで、ぷつんと剪れ放った。

もはや、これまでと見てとったか、森蘭丸が、かけよつてくると、

「お腹、召しませ」と切れた弓を頂きながら言った。だが、それに対して、

「道具もて」知らぬ振りをして、おれは怒鳴った。

月剣と呼ぶ宝蔵院献上十文字槍を受取ると、段階から飛降りざまに、黒革胴の面頬武者を、思い切り根深く突き立て、袈裟と、返す穂先で、馬革胴の寸法武者の胴を、ぐさりと刺し貫いた。すべて、昔の儘だが、誰も、おれの事を「乱妨武者」とは呼ばず、

「天下さま、お覚悟っ」と、突き立ててくる。

日帰りの野駆けのつもりで出て来たので、誰も具足櫃など背負つて来ぬから、みな素肌で、寝着ひとつで戦っている。小姓共、大塚又一郎、落合小八郎、小川愛平。けなげにも、おれを庇おうと、血みどろになつて戦ってくれたが、なにしろ敵勢ども、おれ一人を目じるしに突き掛つてくる故、七、八人は倒したが、おれも肘の肉を削られて、槍がもてなくなつてしまった。

「お大事に、なされませっ」と小姓の菅屋角蔵がとんできて、己れの袖を破つて、肘をまいてくれたが、やはり痛くて腕は動かない。

(室町の薬師寺の方はどうかな)と、ずっと気になっていた。その妙覚寺には、成人した嫡子^{ちやく}の奇妙丸、今の城介信忠が居るからだ。

「早よ、かくなる上は、お腹を召しませ。われら、おん供、仕る」

蘇芳^{すおう}を浴びたように真つ赤な顔をした小八郎が、おれを上縁まで、押しあげて言った。

「うるさい」

口早におれは叱りつけた。しかし登って、板戸をあけると、黒煙が紅い火の粉を、紺模様^{かすり}にしている。噴きだす熱気がむんむん、逆巻いて熱くて、むせそうでもある。

(死のう。死んでこまそ)と覚悟した時は、いつも死ねず仕舞いで、こんなに倅^{せがれ}の事が気になる、すこしも死にたくない時に、何故おれは、腹を切らねばならん。死にとうはない……いやだ。と、おれは唇をかんだ。

そして、ごうごう音させて、渦をまく炎を、ぐっと睨^{にら}みつけて居るうちに、

(その熱い火炎の芯を、辛抱して駆け抜けたら、その先に道がひらけて、妙覚寺の倅のもとへ行けそうな)

そんな気がした。

そう感ずると、矢も楯も耐らなくなった。

昔、小豆坂で敵陣へ、まっしぐらに駆けこんだように、「奇妙」「奇妙」と吾児の幼な名を呼びながら、迸^{ほとばし}る深紅の火炎のまっ只中へ、おれは融けこむように走って行った。

——これは私のかいた本能寺の描写である。

一人称で信長を扱い、その長子の信忠を、幼い日の奇妙丸という実像でなくしては、捉えにくい男親の儂^{はか}ない愛情の虚しさ、

「ひと、いくたびか死を想う」つまり人間は誰でも生きてる間に、何度も死のう、死にたいと想うものだが、案外、死にたい時には死ねもできず、今は死にたくないといった場合に、不本意に死んでゆくものなんだという、皮肉さをモチーフにした作品の最後の一章であったが、どう考えてみても、本能寺に、こんな情況があったとは想えもしないから、これは、その作品（昭和四十年四月号の小説現代所載の「乱妨武者」）を単行本に納めるにあたつて割愛した部分である。

と書くと、まるで廃物利用でもしたようにも想えもするが、従来の「信長観」というものは、こういうものであり、これが世俗における常識でもある。つまり、

「織田信長という人の最期は、かくもあつたであらう」

「こんな風に壮烈きわまりない敢闘をしてから、潔よく、人事をつくしてのち、従容^{しょうよう}として死についたらう」

と、読む方も、そういう期待をもっているから、書く方も、抵抗をさけるように、それに

おもねって、かいてきたものである。

つまり、どの作家のかくものでも、みな似たりよつたりなので、殆ど大同小異である。

ただ変り種としては、この中へ、茶碗屋の阿福がでてきたり、忍者が出てくるくらいのものでしかない。

しかし、「こういう莫迦^{ばか}げたことはない」「こんな本能寺の場面はあり得ないことだ」

といった例証として、ありふれた概念的な信長の最期の場面の見本として、初めに掲げるのに、まさか他人の書いたものを持つてくるわけにもゆかないので、自分のものをのせたのである。

廃物を利用したという訳でもなければ、これが良いと想つて出したのでもない。

こうした描写のもととなる下敷、つまり種本という資料は、〈当代記〉〈天正記〉〈太閤記〉〈信長公記〉と揃っている。そしておかしな話だが、まるで言い合せたように、

「本能寺における信長の最期」は、みな筆を書いたように同一なのである。

だから現代の、もの書きのかくものも、これまた、みな同じようになってしまう。

さて江戸時代に「番町で目あき、盲にみちをきき」で知られた塙保己一^{はなわほきいち}という先生がいて、正統の「群書類従」という、それまで散逸していた写本、版本の類をあつめて編纂^{へんさん}したとき、「類従制」とよばれる方式をとった。

今日でいえば「多数制採用」というのか。同じ時代、同じ具象を扱ったもので、同じような事が書いてあるものは、比べてみて、それが同一か相似していたときは、双方が例証となつて、これは良質とされ、他と内容が相違しているものは、これは「信用すべき対照物がないから」と悪書にされた。

仏教の「十目のみるところ、十指のさすところ、それ正しきかな」という、昔の民主主義採決法である。一つの方法には違いないが、それが今日まで、古文献、古史料の鑑別法には、この類に従う方式が、今も生きて使われている。従つて、

「六月二日、明智光秀に包囲され、弓をひき槍で闘つて、のち火をつけて死ぬ信長像」がみな、類は類をよんで内容が同一なところから、さきにあげた古書は「第一級の史料」と目されている。そして、それと相違するような物は、古来、一冊たりといえど陽の目はみえない。

「信長殺しは、光秀ではない」などというものは、一五八二年六月の事件のときから今日まで、三百八十五年間に一度もでていない。

つまり、この本は、一世紀に一冊どころか、四世紀にわたつて、初めて、この世に現れたものである。

出来ることなら読んだ後で、すぐ、ビニールの袋へでも入れ、罐かんに入れ、地中へでも埋めて頂きたい。これだけ調べあげるのに、今の時代でも二十年の余かつたから、後世の人が、

やるとなると、もっと大変なことだろうから、せめて、その労を省くためにと、これはお願いする次第である。

それから、これは珍しい形式であるが、これも小説である。といって、ロマン、フィクションというように一概に考えられても困るから、引用文献と長いものは原文を挿入し、引用書名はへ型の史料扱いのものと、「型の、似て非なるものに分類したが、前述の、信長公記以下のものは、私は史料としては認められないと思うが、世間の評価に妥協してへ型で、これを用いた。

そして、これは「信長殺しは誰なのか」という究明のレポートではなく、「信長殺しは光秀ではない……という想念に憑かれてしまって、世俗的には一生を台なしにしてしまった愚直な男の物語」として、これを読んで下さることを初めに約束して頂く。つまり、ノンフィクション・ノベルなのである。

まず初めに「信長公記やその他の各書の内容が、こと信長殺しに関しては、同一であるから、本当らしい」という誤解について、いいたいのは、「なにも学校の試験のように、同一の時刻に一緒に書かれたものではない」

つまり「あの中の一冊が種本で、あとは、みな、それを下敷にして作成されたもの」

これが試験の答案なら、「みなカンニングして写しとったにすぎない」ということである。各書別に、その不条理はついてゆけるつもりだが、なにも十人が空を指さして「青い」といったとて、それだから「空は青空」とは決まらない。なにしろ「虹の見える空」だってあるのだということをいいたい。

〈天正記〉というのは、信長の次の国家主権者の秀吉政権の御用作家が書いたもの。

〈当代記〉は、筆者が、松平忠明などとも言われているが、次の徳川政権の資料。

〈信長公記〉と〈太閤記〉はライトされ焼き直しをされ、なんともいいようもないものだが、今日では誤解され過大評価をされている。——といって、何も、誤解している歴史家をここで責めようとしているのではない。

なにしろ人間というものは、誤解されたり誤解してこそ、その社会構成もなりたつ。

もし誤解ということがなければ、人間関係というものは持てなくなってしまう。なにしろ自分を「頭脳明敏」と世間から良く誤解させようと思えばこそ、小さい時からよく勉強して一流校へ入ろうと努力するのだろうし、女性が化粧や服装に細心に気をくばるのだって「良く誤解されたい」の一心で、真剣にするのだろうし、あらゆる人間の努力精進というものは、「いかにして、うまく誤解され得るか」という命題にかかっているようである。

なにしろ人間社会では、実際の能力や、それ自体より、「どれ位まで巧みに勘違いされるか」という事に、すべてが掛っているかのようにさえ見うけられる。そしてみんなが（良い

ように誤解しあっている）その間はよい。それは、時には〈愛〉といったものの発生にも繋つてゆくだろう。そうして、そうした場合には、誤解といった言葉が〈理解〉といった呼び方にも美化されて装われもする。

しかし、なんといっても〈誤解〉というものは、本質的には、それは誤解でしかあり得ない。なにも誰も彼もが、みんな都合よく誤解されてしまつて、その（好ましい快適な誤解）の中に安座して、ふんわりと雲の上に浮かんで居られるというものではないのである。なんといつても大多数の人間は、みんな自分にとつては（好ましからざる誤解）ばかりを受けているのではなからうか。そして、その汚辱と劣等感の中に、ともすると挫けてしまふような自分を奮いたたせ、なんとかして（良き誤解）を周囲からして貰いたさに、そのように想わせようと精進もしようとする。これを、ふつうは努力ともいう。

そして、そうすることが「生きる」ということなんだと、自分で悲壮感にかられて陶醉したり、感傷的になったりもする。

だが、生きている者はいい。しかし、もう死んでるものは、どうするんだろう。

「良き誤解」とは、まったく反対に「より悪すぎる誤解」を死後も烙印のように押されっぱなしの男さえる。

「何事も年月が押し流していつて解決する」

という言葉もあるが、彼のように、星霜ここに、三百八十五年も、誤解されつ放しなもの

気の毒である。

京都府の福知山市へゆくと、日本で唯一つの彼を祀った神社がある。

「御^み霊社」という。宮司の森本孫兵衛が、気の毒がって毎日慰めてやっているそうだが、その宮司だって、やはり、より悪く誤解している知識しか持ち合せていないだろうから、いくら柏手をポンポン叩いて貰っても、彼は、池の鯉みたいには浮かび上れはしないだろう。

「誤解」というものは、良きにつけ悪しきにつけ、それは生きている人間のものであって、死んだ人間には、それこそよけいだろうと、私は思う。

そこで……

「一五八二年六月二日の午前四時から八時までの間に、織田信長という男は死んだ。しかし、あんな死に方はしていない。これは荒唐無稽なデフォルメにすぎぬ」ということ。

そして……

「明智光秀を信長殺しに仕立てあげているが、彼は、信長が〈死〉という状態に追いこまれた同日の午前七時半までは本能寺へ近よってもいない。初めて光秀が京都へ姿を見せたのは、二条城の信忠も焼死した九時すぎである。つまり現代の言葉でいうならば、明智光秀にはアリバイが成立している」という事実。

それなのに……

「誰も彼もが光秀を、信長殺し。と、きめこんでしまつて、一人として怪しむものがないのは、何故だろうか。勿論、三百八十五年前は『信長殺しは光秀』としておいた方が、当時の国家権力者には都合は良かったろうが。なんぼなんでも、もう本当の事が判つて、彼の誤解は、そろそろ、とけても良いのではなからうか」と考える。

さて、何故これが今日まで、解明できなかったかという、日本国内の史料では、とても、その参考になるものが見つけ得なかったからである。

そして吾々が怠惰であり、一つの具象を飽くまで追及してゆくという真摯しんしさに欠けていたせいではあるまいか。

つまり、これは三百八十五年間にわたつて誰も遂行できなかったことを、私が初めてしたというのではない。ただ労多くして酬むくわれる事のない、そうした徒労は、私のような愚かな者でなくては、他にはしなかったというにすぎない。

それと、もう一つ。これは世界史から孤立していた日本史の断層にも起因している。

「戦国期」というものを、英雄とか豪傑といった人間関係においてのみ把握する従来の帰納法は、あれは「三国志」の模倣でしかない。もちろん今日の吾々の常識では……

大東亜戦争の終末を、(広島や長崎へ投下されたアトムのためとは想う)だが、それをトルーマンや、投下した飛行士の名では考えもしない。それと同様に、戦国時代を回顧すると、天

文十二年に日本へ伝来した鉄砲が、まず念頭に浮かぶ。だが日本国内では、その弾薬の煙硝は生産されない。当時の「死の商人」は、マカオから季節風につて、夥しい硝石を売りこみ、彼らの手によって、日本の戦国時代は演出されていたといってもそれは過言ではあるまい。すべての謎は、海の彼方のマカオに、こそある。

マカオ

香港の海は青い。南支那海の水面は透き通るような翡翠の色を視せている。

だが、東^{イースト}ラマ海峡をわたって、ポルトガル領のマカオに近づくと、まるで水脈が、くつきりと、イギリス領との境界をしめすように、変化してくる。波のうねりは同じ勾配でも、起伏の瀟^{なみ}は、なだらかに続いている。水の色がレッド・テームみたいに染ってくる。

そして陸へ近づくにつれてココア色になって、まるでチョコレート^{チョコレート}の海になる。

突堤に小屋掛けした出入国管理処の役人の顔も (MACAO HYDROFOIL CO. LTD) の看板をだした船会社の事務員の皮膚も、赤黒い艶がまず目をひく。

黄色人種というが、レモンのようにすべすべした広東人^{カントン}に比べると、葡萄牙人^{ポルトガル}は浅黒い色素を、まるでドーランでも塗ったように、てかてか輝やかせている。そして広東人と違って、細い口髭や苧りこんだ顎髭^{あごひげ}をたくわえている。植民地の威厳の表徴なんだろう。

「やあ、よくきて下さいました」

教わってきた電話番号の4433と5353の、どちらに掛けようかと考えながら、パスポートの査閲をすませ、入江の陸地へ足をふみだした途端、印度人ほど黒くはないが渋紙色の顔をした長身の男がよってきた。

指さす胸には、(CABLE:MACTOVS)のバッジをしていた。ここの交通公社の出迎えだった。

昔は軍港で、サンチャゴ砦とかバラ砦というのだそうだが、とつつきの丘陵は楊樹が緑色に茂り、海桃の紅い花が、まるでバラのように咲いているのが目についた。車にのつてから、フロントのガラス越しに、重なり合うように三つ続いた丘を指さし、そのまん中のペンハの丘に、「司祭はおられます」と彼は指さした。

そこで「面会は」ときくと、剛毛の目だつまるで植物的な、根茎をやたらにつけた山芋みたいな指で十字をきりつつ「一日前に申込むのです」と告げた。そして黙りこんだ此方を、何か気にさわったかといったように、心配そうに、大きく首をまげて覗きこみながら、「この通りはグラン・プリ・レースの道。十一月十五日には、各国の人が集まります。先月の大会には、日本の車いくつもきました。三位と四位とりました」と、その自動車会社の名前をあげた。彼は、機嫌をとっているつもりで、よいニュースとして教えてくれたらしいが、こちらはテレビで（わが車のナントカは、ドコドコのグラン・プリで、またも優勝し、一位、二

位を独占) なんてのばかりコマーシャルされているものだから、三位や四位をとったなどと聞かされても、なんとも返事のしようもなかった。言われて判ったのは、これまでマカオのグラン・プリなんてのは、てんで耳にしたこともなかったのは、ここでのレースでは、日本のメーカーは勝ったためしがないから、それで宣伝されていないんだということだった。

「アベニーダ・アルメイダ・リベイロ」と、彼は困ったように笑顔をつくって、ゆっくり発音してみた。なんの意味かと考えていると「ジス・イズ・マカオズ・メイン・ストリート」と、リーダーでも読むような口調で左右を指さした。三十階だて四十階だてまである香港に比べると、せいぜい二階だてしかない、この目抜き通りは、まるで嘘みたいな静かさで、これが市街を二分している大通りとは、とても信ぜられない程だった。

「ラルゴ・ド・セナード」と広場へ入ると、車をとめて、彼は、また発音した。市政庁のまんな前である。白い立像が立っていた。近よってみると、

「十六世紀に初めて、このマカオへ上陸した最初のヨーロッパ人」と刻まれ、その名は、Jorge Alves となっていた。

何国人だったろうかと、フット・ボールの球より大きな顔を仰いでみると、右腕が肩からなかった。さては海賊で、片腕のジョージかなんとかいわれた男だったのかと、ひとり合点していると、

「暴動バルリコです」と彼は小声でいった。そして、「もう終わりました。心配ありません」とつけた

した。

そう言われて左右を見廻すと、目ぬきの場所なのに、商店が硝子を割られたまま板をはりつけ、廃屋のように並んでいた。まだ補償の金額が決まらないから、中国人の店主は沢山とろうと、わざとあしてあるのだと、彼はヨーロッパ風に掌で掬う^{すく}恰好をして、肩をすくませて苦笑してみせた。つまりツーリストの彼としては、視せたくない所を、うっかり見物させてしまったという表情だった。

それを、わざと無視して、さも興味をもったように訊ねてみると、なんでもマカオに附属しているポルトガル領のタイパ島に、中国人が学校を建てるというのを、新たに本国から赴任してきたばかりのノブレ・デ・カルパリオという総督が、その必要なしと許可をしなかったところ、それに憤慨した島民が、大挙陳情しに、このマカオ政庁へ押しかけてきた。この中国人も一緒になって騒いだから、千人あまりの群衆になったという。そこで面喰った新任総督は、四年交替で本国から進駐している兵隊を、聖フランシスコ兵営からよんだ。日本の機動隊と違って棍棒をもっていない兵隊は、押寄せる群衆に発砲した。

「死者七人。重傷七十人。あとから二十人死んだが、みんなセント・ドミング教会のさきのラファエル病院で、残りの者は手厚く看護されています。勿論、ただです」

言いわけをするように彼はいった。そして吾々は、アメリカ人みたいに、ベトナムのような乱妨はしない。暴徒に襲撃されたから、それは止むを得ない自衛行為であったと、ぶつぶ

つと聞きとれないような早口でいった。

「何故^{アークン}」と「どうしたんだ^{ゲ・エ・リ}」の二つの単語を繰返して、執拗^{しつよう}に喋舌^{しゃべ}りたがらない彼の口を割らしてしまったものの、洗面を作っている彼を眺めると、なんだか後味の悪い想いにさせられてしまった。なにしろ、

「こんな暴動は、初めてです^{スンカ・ッピークル・バル・リコ}」

彼は、くりかえして、そればかりをいった。

つまりポルトガル人の立場として言訳をしているのかと、初めは聴いていたが、彼の取り越し苦勞は、どうも、そうではないらしい。せっかく観光にきた旅行者が、この暴動のあとをみて気が変り、せっかくリザーブしたホテルもキャンセルして、治安が悪いのを心配して、早々に引揚げてしまうのではないかという心配をしているらしかった。だから、

(ツーリストからせつかく案内にきたのに、変な所を見られてしまい、この日本人に逃げられでもしてはといった表情)が、ありありと彼の黝^{くろ}ずんだ顔に懊惱^{おうのう}の翳^{かげ}をやどしていた。

だから、何んとかいつて彼を慰めねばと、

「まあ、たいしたことはないね^{ナ・ウ・ン・フ・ア・ス・マ・リ}」

と、ゆっくり首をふって滞在の意志表示を簡単にしてみせた。すると、あんのじよう、「よかった」という意味であろうか、「エーエノールメ」を盛んに連発してみせた。

車へまたのせられた。だからホテルへ案内されるものとはかり思った。そこで昔アマラー

ル総督の暗殺された記念碑だとか、棚でかこまれた円い石の場所が、その息を引収った地点だといった説明も、うわの空でききながしていると、小さな石作りの門がみえてきた。右側にポリスボックスがあった。

変なホテルだが、門前に交番があるとは、こりゃあ用心がいい。きつと彼が、まだ心配をして、わざわざこういう治安上安全なのを選んでくれたのかと想った。そこで、

「こりゃあ、いいね」と降りかけると、彼は周章で、こちらの肩にかけてあるカメラをはずして首をふった。だから此方も、訳が判らず妙な表情をみせたらしい。彼も困ったように片目を瞑って「国境」と、続けて二度も発音した。なんだ。それで撮影禁止地帯になつてゐるから、カメラは車内へ置いて出るのかと、ようやく納得した。だが、うなずいて見せたものの、国境関門だというのに、小さなコルトのケースを提げたきりの警官では訝しかつた。初めは、香港の啓徳空港で見かけた英国領の巡査が、両肩から白い袖をとって付けたように、くつつけているのが、もの珍らしく印象に残っていたから、それで黒一色の制服は兵士かとも考えたが、まさか銃をもたぬ軍人もあるまいと想い直し、

「歩哨は」と訊いてみた。軍隊という言葉が突嗟に出てこなかつたからである。

彼は首をふった。関門のところに菩提樹の大きなのが、まるで両手を一杯に拡げるように枝をのび若葉を茂らせていた。彼は、その樹蔭に入ってから前方を指さし、向うに中共軍の兵士が銃口を、こちらへ向けていると気兼ねするように注意した。楊樹の茂みを透かして

眺めると、百メートルおきに電話ボックスのような紅塗りの屯所が、ずらりと並んでいた。よく見詰めると、まるで人形みたいのに二名ずつぐらい身動きもせず、兵士が此方に鉛筆ほどの銃を向けていた。

十二月三日の暴動のあつた日。中国人がポルトガル兵に撃たれて死傷者が出たと伝わると、昔は川にかけられた橋だったという真空地帯の通路を、中共軍の兵士が、同胞を救えと殺到してきたそうである。その時は、ここにポルトガル兵の立哨もいたし、一個小隊の機関銃隊^{メトラリヤドラ}もいた。だが、それが、まずかつたと彼はいった。なにしろ中国人は八億いる。全世界の人類のうち、四人に一人は彼らなんだ。とそんな言いわけを樹蔭からつけ加えた。

つまり多勢に無勢でポルトガル兵は、この国境が防ぎ切れず、殺されたか捕虜にされたのだらう。なにしろ中共軍は、プライア・グランデ湾にそったパニャン並木を埋めつくすぐらい一杯やってきて、ラルゴ・ド・セナード広場で傷ついた中国人の同胞を助け、マカオ政庁の上に^{ひるがえ}翻っているポルトガル国旗を、

「下へ、^{デ・エ・イ・テ・オ・バ・イ・シ・ヨ}ひきずりおろせ」とまで要求したそうである。その結果、中共軍が引きあげた十二月四日から、国境の立哨は換って警官^{ポリシア}がしていると、彼はいうのだった。

なにしろ、まだ二十日とたっていない。だから無理もないが、彼は、関門のまん中につつたって向うを透かし視しているのを「さすがに日本人^{ケ・イ・ジ・ヤ・ポ・ネ・ス}ですな」などと、お世辞をいいながら、自分は、まるでポルトガル人ゆえ狙撃でもされるといふのか、菩提樹の幹を楯にしたまま動

こうとはしなかった。

国境の関門の左右は、昔は河だったというだけに、ところどころ沼地になっていて、葦が青々と茂っていた。車に戻ってから、当時の新聞をあつて見せてくれといったところ、彼は、何もでてはいないと断りをいった。そして、車を運転しながら、

「エーラス・テイマ」と何度も、こちらは黙っているのに、ひとりでおつくさいっていた。中国語でいうと（メイフアーツ）、仕方がないといった諦めの文句らしかった。

車は南西へ向っていた。海岸へでた。対岸の小島がみえた。名をきくと、ラツパ島とこたえた。そうか。喇叭ラッパの語源はポルトガル語だったのかと考えたりしていると、

「ビューテフル」と彼は英語で、この辺りのパラカ・ポンタ・ホオルタは、マカオで一番美しい景勝地だといった。しかし、ウスリー河や揚子江ヤンツーキエンみたいな泥色をしたこの水面の何処

に、そんな美を感じるのかと、返事もせずに黙っていたら、アーチ型のアーケードの商店街へ出た。中央に噴水があつて、パニヤンの並木が、十二月の下旬だというのに眩しい陽ざしを遮さへぎっていた。樹々の長く尾をひく影を眺めながら、やっと美しいという意味がのみこめてきた。この配置は、スペインやポルトガルのあるイベリヤ半島のイミテーションである。だから本国からきている連中は、ノスタルジアにかられて、ここの南欧的な風物に旅愁をかきたてられ、望郷の念を催し、つい、美しいなどと言いだしたのであろう。

だが商店街に入ると、一軒の店に長い行列が続いていた。何を求めているのかと、瞳をこ

らすと、その縦のウインドに大きな肖像写真が掲げられ、毛沢東選集という文字がみえた。書店であつた。振返つて行列を眺めていると、「中共側の国境に、向うのあの位の子供が沢山集つてきて、一日に何度も大声をあげて、吾々を脅迫するのだ」と彼は所在なさそうに訴えてきた。そして、こんな唄を合唱するから、こちらの中国人も真似する。自分も覺えた、ハミングでメロデーをきかせた。毛沢東讃歌と、それは東天紅の節廻しだった。

こんな静かな眠つたような土地に、はつきりと如実に刻みこまれた民族の対立を、まざまざ見せつけられると、早くホテルへ案内させて、そこで、まずシャワーでも浴びようなどという、そんな安易な氣持もとんでしまった。だから、荷物を置いて、ひと休みしてから出かけようと思つていた図書館へ、このまま、場所を覚えておくだけでもいいから、すぐ行つてみたいと話してみた。すると、「ナウン」とうなずいて、彼は微笑んだ。

ポルトガル本国のアジューダの図書館やエヴオラ図書館に比べれば劣るかも知れないが、エジンバラ大学の図書部の手で整頓された三万五千の蔵書が、そこにはある。だから、彼処へ通うのなら長滞在になるのだらうと、彼は彼なりに、職業柄すっかり氣をよくしたらしい。車のスピードが百まであがつた。だから、さつとついてしまった。降りてみて、どうも見たことがある所だと思つたら、片手を叩きこわされたジョージの白い像が斜めにみえた。なんのことはない。狭い土地なので一周して、また、もとの広場へ戻つてきたのである。

だったら何故、おっかなびつくりで中共の国境まで、わざわざ案内して行つたのか、訊い

てみようと想ったが、おそらくツーリストの観光コースにでも入っていて、彼は習慣で行ったのだらうと考えたし、それより早く日本では見られない十六世紀の戦国史料が見たかったから黙っていた。うっかり何かいって、また他の観光コースへでも案内されてはと用心をしたのである。

典型的なポルトガル邸の構えをした政庁の建物の中へ、彼は、つかつか入っていった。「ビブリオテカ図書館」といったのに、こちらの発音が悪くて、聞き違いをされたのかと狼狽ろうばいした。

だが、もし違っていたら、その時に言い直してもよからうと、すこし危ぶみながらもついでゆくと、石造りから木造の廊下へ入っていった。マホガニーらしい階段を昇りつめた二階に、図書館の標識アプイソリスがでていた。その文字をみた途端に、ほっとして莚たばこが吸いたくなった。だがポケットからピースをだすと、ここは禁煙になっているらしく、彼は大きな掌で、それを上から押さえるようにして止めた。

板碑が、つき当たりにおいてあった。

莚をとめられた恰好の悪さに、ひとりでつかつかと側へ行った。古びた華文字が、かすれていて読めもしなかった。だがツーリストの案内役の彼は、すぐついてきて、もう暗記でもしているのか、碑面も視ないでそらでゆっくり説明した。

「神の名の都市。かくまで忠節なところは他にはあらず。われらが帝王 Dom Joao 四世陛下と、この地に派遣されし陛下の総督の Joao de Souza Ferreira の名において、比類なき住民の

忠節を嘉^よみし、ここに、これを証明するものである」

文句はのみこめたが、人名が一度きいたぐらいでは判らなかつた。また聞き直すのも厄介だったから、ノートをだして陛下の御名と総督の姓名を、その儘に写しとった。すると消滅しかけているが1654と、この板碑が刻まれた年号があつた。そこで日本の歴史年表をひいてみると、承応三年。徳川家光が死んで由井正雪や丸橋忠弥の叛乱未遂のあつた慶安四年から三年目の時点にあたつていた。

十九日前に暴発した騒動を、こんな事はマカオでは初めてだといって、盛んに彼が強調していたのも、あながち嘘ではないらしい。

なにしろ織田信長が二十四歳だつた1557年に、ここを占領してから、徳川家綱將軍の時代に「他に比べようない忠節さ」と賞められて折紙をつけられているくらいだから、この1966年の12月3日まで、四世紀にわたつて穏やかな所だつたのだろう。

「……せつかくの定説が覆^おされました」案内の彼は、さも残念だつたと唇をまげた。「定説を、覆す——」と、私も無意識に鸚鵡^{おうむ}返しに、その言葉を日本語で繰返していた。

想念

定説を一挙に変えてしまうという事は、暴動のように集団の行為でしめすのなら、多少の

犠牲はあっても不可能ではないかも知れない。だが、これが歴史的な事実となると、これは難しいものである。

1582年の6月事件。世にいう「本能寺の変」は、これは「明智光秀が信長をうった」という定説になっている。そして、その後、三百八十五年にわたって、何んの異説もない。そもそも、このマカオがポルトガル領になった弘治三年とは、当時、清洲城にいた織田三郎信長が、その異母弟にあたる（土田下総守久安の娘がうんだ二十二歳の）織田武蔵守信行を倒し、ついに織田一族の棟梁の位置を確保した年にあたる。そして、その二十五年後には京の四条仙洞院にあった本能寺に宿泊中に、クーデターにあって、敢えなく、生涯をとじた。これは一つの事実である。だが、その下手人。当時の言葉でいえば「解死人」は誰なのか。もちろん、はつきりとした「定説」は光秀である。だが、私がひねくれているのか。どうしてもそうとは想えもしなかった。

だいたいこの発想は、横浜の花咲町で生まれてから四谷の大木戸へうつった私が、当時大國座という芝居小屋へ初めてつれてゆかれた確か、六歳の時に始まる。

それは義太夫のチョボにのって、

「夕顔棚の彼方より、現れ出でし明智光秀」

デンデンと太倅ふしどおが入って、そこでカンカンカンと柝きが入って、蓑をつけた彼が現れ、笠をとって、赤塗りの顔をグツと見得をきる。いわゆる見世場なのである。観客は手を叩いた。

だが六歳の私はポロポロ泣いた。「怕こわいのかえ」と伴ってくれた祖母はいった。私は首をふつた。そして、その儘泣きじやくつた覚えがある。どんな感情かというと、幼稚な単純な同情。棄てられた猫をみて憐れを催すような、そんな衝動的なものだったかも知れない。唯、その前後をよく想いだしてみると、当時の新聞紙は総ふり仮名だったから、四、五歳ぐらいから、パズルをとくように漢字を眺めよんでいた。だから六歳の年頃でも「こどものくに」といった幼稚園むきの絵本でなく、もう「日本少年」や「少年倶楽部」をみていた。当時の附録は今とは違って、とてもシンプルで「組たてパノラマ」が多かった。

一枚の厚紙に人間や松の樹や御殿が刷りこんであって、点線でそれを切りとり、「ノリ」と明示された白紙のところで折りまげ、台紙にはりつけ、サンプル通りのパノラマ舞台をこしらえるのである。

これは、この時代に流行した菊人形の名場面と、まったく軌を同じくしていた。「忠臣蔵の清水一角の切り合い」「曾我兄弟の裾野の仇討」といったようにジャンルが決っていた。もちろん「本能寺の森蘭丸」もレギュラーだった。中心は蘭丸と安田作兵衛の戦闘であるが、上手には白衣をきた白い顔の信長。下手には赤い顔をした敵役の光秀が左右にたって、この運命の決戦のパノラマは構成されていた。たしか、あの頃は、少年雑誌の附録としては毎年どれかにはつけられていた。そして幼ない私などは、白塗、赤塗などという言葉は、まだ知らないから、唯「良い方」「悪い方」つまり善玉、悪玉といった単純な鑑別をしていた。

そして、可笑しな話だが、子供の精神において、それが、この世の真実というものと、かたく信じこんで疑わなかったのだ。

それなのに大国座へつれてゆかれたら、悪玉の筈の赤塗の光秀が、ボール紙の附録と違って生きて動いている。

そのうえ、悪人の筈の彼が、とても悲しそうだったから、びっくりして哭ないてしまったのだろう。

という事は、幼ないながらも自己に植えつけられていた信念の崩落に愕おどろき、光秀に同情するというより、自分自身が、すっかり狼狽し、どうとも、表現をしてよいか判らず、唯ワアワアと泣いたのではあるまいか。と考える。なにしろ私という人間は、今でも途方にくれると、昔程には泪なみだもかれて出ないが、それでもウウと哭く。だから当時も、三つ子の魂という位だし、それに人間それ自体の形成は、いくら歳月がたつたとて、そう変るものではない。だから、きっと、そのような事ではなかったか。とも想うのである。

つまり判りやすい言葉で言うならば、私という人間は、六歳にして、すでに自信喪失をしてしまったということらしい。だから、そのコンプレックスが、ヒステリックな泣き声をあげさせたのであろうし、明智光秀という昔いた一人の人間の具象に、世間の通念とは、まったく裏腹うらはらな同情をもってしまったのだろう。

そして、その時点から、可愛気のない疑りっぽい暗い子供になってしまい、成人してから

も、私には他人には好かれない、そんな陰湿な性格が、翳りを濃くしたようである。

その頃、私は「作家群」という同人雑誌のグループに、最年少者として入っていた。まだ学生だった。昔は、今ののようにアルバイトの口はなかった。だから、日本の四国で死んだモラエスを飯の種にして、その翻訳にあたっていたT・Hという先生の助手をしていた。その先生が、いつか酔払って、

「お前は光秀の真似をして謀反をしようとするアナーキストのグループに、近頃は入っとるそうじゃがいかなぞ。だいたいモラエスも『信長殺しは光秀ではない。ちゃんとした目撃者がいる』と書いとる。なんでもそれはポルトガル人の坊主^{パードレ}で、マカオで死んだそうだが、ちゃんと記録まである。といっとるぞ」

と怒鳴りつけられたことがある。これは「作家群」の同人の一人で、ローレンスものの、翻訳をしていた酒豪が、呑み仲間の某という評論家が、新宿の喫茶店の、女の子とできて、早稲田で当時下宿屋をしていた奥さんの許へ帰れず困っているところを、イガグリ頭で一見まじめそうな私を子役にして、当時のアナーキストのグループの0のところに居るようアリバイ工作させた。

つまり私はアナーキストの方の使いとして、その彼の生活費をうまく、奥さんの許へ貰いにゆく役目をしよわされていたのである。

だから軽率な私は、先生の口にした信長殺しの話を、もつとよく確かめておけばよかったのに、それより自己弁護に周章てふためき、長火鉢の前に坐っている奥さんが、いかに怖ろしく、なかなか金を出してくれないとか。しかもその彼ときたら「早稲田文学」に原稿をのせてやるという口約のもとに、電車賃もくれず、時によると私の小遣いまで貸せともって行ってしまうなどと、そんな詰らんことばかりを同情をひこうと、多弁になって喋舌つたものである。

そんな愚昧な私だから、その後、生きてゆくことに何度も失望した。繰返して、いくたびとなく死んだ。だが自分では、そのたびに、それで精算したつもりなのに、死は、いつも私に、つれなかつたようである。早いときは数分間で見放されてしまった。最高記録だって、アルセニックを呷^すったときの一週間である。私は今でも、月に一度は、死を想う。なにも生命保険の年々の掛金が莫大すぎて勿体ないと、吝^{けち}で考えるばかりでもない。窒息しように、やり切れないからである。だが、そのたびに、内股に左右から交錯^{ささ}して刺れつばなしの食塩注射の太い針の鈍痛や、胃洗浄の黒いゴム管を、すぐ連想してしまう。

あれは、いやなものである。想い出しただけでも、こみあげる嘔吐^{おうと}に、へきえきさせられる。酸っぱい胃液が口の中にひろがってきて、きまって激しい痛みが、身体を中心に揺さぶってくる。といって連想の暴風といったような感覚的なものではない。なにしろ私の胃壁は、

かつて服用した種々の毒物によつて、すっかり爛れ^{ただ}きつてしまっているからだ。

こんな激痛に襲われるなら、毒になるもんなんか吞まなきゃよかったと想う時もあるが、なにしろ、その時は、まさか、あとで生きるとは想いもしなかったのだから、これは悔やんでも仕方もない。

だが苦しみ出すと、のたうち廻つて反転する凄じさなので困つてしまう。鎮痛剤には、死を想うしか、逃避はない。「もう直^じきに死なしてあげるからね」と自分の肉体にいいきかせてやるしか慰撫策もない。そして、そんなときはきまつて幼ない日にみた、夕顔棚の彼方より現れ出たる明智光秀が、赤い顔で^{まぶた}瞼に蘇つてくる。長い附きあいである。お互いに口こそききあつていないが、友情みたいなものは感じあえる。だから、私は、うんうん^{うな}唸りながら、苦しがつて腹ばいになりながら、「こんなに辛い想いをして、ひどいめにあうのも、みんな、あんたのせいなんだ」と怨みごとをいつてやる。いやなことは自分のせいにするより、ひとの所為にする方が、これは痛み止めの、精神安定剤になるからである。

といつて別に言いがかりをつけているのでもない。私が初めて自己喪失を願つて、それを試みた六歳の日から、彼は瞼にいた。繰返して自己を見失い、観念的に死を想い、自己逃避を、そのパターンの中にエスカレーションしてゆく段階において、彼は白い手袋や制服はつけていないが、蓑をつけてエスカレーター娘のように立っていた。つまり私の想点においては、光秀というイマジネーションは《死》をいつも意味していたようである。そして……

私は、それに対して《真実》というものを追いかけて廻して反撥しようとしていたらしい。

だが、結果としては、なんともならない虚しさに、自己嫌悪を持ち続けて居るのかも知れぬ。だから、もちろん生きていることが素晴らしいなどと、そんな、だいそれた己惚^{うぬぼ}れはしたこともない。だが、何度も死んでは、追いつかされるように、また蘇^{よみがえ}ってくるたびに、蠅^{ハエ}には蠅の真実があり、蚤^{スズメバチ}にだって蚤自体の真実があるのなら、人間がより集って作っているこの人の世にも、真実はあるのではあるまいかと、そんな期待をもったこともある。また、そんな事でも考えなければ、とても生き直しながら出来るものじゃない。

なにしろ、死に損^あって、ぼんやりながら眼がさめ、意識がついてくる状態というのは、酔払^よって、うたた寝しているのを起こされた時と、自分の気分では相似しているが、なにしろ普通の朝の目覚めとは違う。爽快なんてもんではありやしない。

死が、まだ澱^おりをのこして、身体中をけだるくさせているから、覚醒したからといってパツと起き出せやあしない。たいてい黒いゴム管の紐つきである。それも口中から押しこまれた胃洗浄の管や、食塩注射のゴム管ばかりならよいが、いつか肛門に挿入されているのには、まるで有尾人に生れ変わったのかと瞬間、さすがびっくりしたことがある。何故かと訊きたかったが、そこへ看護婦が無理やりに、はめこんだ時の状況が、まるで冒瀆^{ぼうとく}されでもしたように、羞恥と屈辱を覚えたから聞かず仕舞いだった。しかし、おかげで、どうも、その時から脱肛^{だつこう}の気味がある。まあ、なにしろ生き返ってくるということは、それ自体だけでも厭^{いと}なも

のである。

いつも気がつく、解剖台に寝かされたみたいの下着はみんな剃ぎとられている時が多い。うっかり眼でもあけようものなら、たいてい大きな口をあけた若い看護婦が、すつ頓狂^{とんきやう}な声で何か叫んでいる。

すると手当をしていたインターンみたいな若い医師や、他の看護婦共がワアーツとは言わないだろうが、さも凱歌をあげるみたいに、口をパクパクさせ目を輝やかせる。もちろん聴覚は戻ってくるのが遅いから聞えはしないが、しょっちゅう病院なんてところは、ベッドで人を殺してばかりいるから、こういう反対現象は嬉しいのだろう。

「よかったですね」とこつちが聴えるようになると、毎度いわれる。最近は馴れてしまったから、自己満足のひとりごとだと知らんぷりをしているが、初めて聴かされた愛知一中の三年生の時は「何がです」と逆ねじをくわせたものである。せつかく、ひとが死のうとしてるのを、本人の意志を蹂躪^{じゅうりん}し、精神喪失の状態を奇貨として弄んでおいて、何たる言草であらうかと、憤然として十五のときは喧嘩したものである。

次に迷惑するのは、たいてい意識がつくと、その日の午後か、翌日の午前中に、旧制の中卒ぐらいの所轄署の私服がくることである。生れた時には、どうして、どんな具合に出来たのかとは聞きにもこないくせに、こういう時だけは、何故死のうとしたのかと、事情聴取に

くる。あわよくば、何処かで女でも殺しての後追い心中ではあるまいか。とか、又は会社の金でも横領しての、申訳ではないかと、期待をもつてやってくるから相当にしつこい。あまり、くどくてうるさいから、横浜の病院で喧嘩をしたら、いくら自分の身体とはいえ、あんたも人間なんだから、つまり、これは殺人未遂の容疑だと、すつかり脅かされたことがある。だから、「死にもまさる恥しめ^{はずか}」という表現があるが、死に損う恥しめも相当のものである。誰一人として、「残念でしたね、次の機会にはぜひ頑張りましょう」なんて、慰めてくれる心優しい人間なんかはいない。みんな、こちらとは裏腹に「よろしゅうございましたね」という。つまり目をさました時から、周囲の人間とは、まったく反対な自分自身を、そこには如実にみせつけられ孤立する。

そして、なんともならない違和感を、圧迫されるよう、ひしひしと押付けられてしまう。そして、どこの病院でも同じことだが、まず意識を回復するが早いか、帯紐類^{おびひも}はとりあげられる。蒲団のシーツやカバーも剥^はがされてしまう。

せつかく蘇生させたのに、また首でも吊られたら、入院費がとれなくなるからと、事務局の方の指図らしい。いつだったか誤って前と同じ病院へ担^{かつ}ぎこまれてしまった事がある。そしてたら歓迎してくれて、常連だからと看護婦が同じベッドで退院するまで寝てくれた。だから、そこを出る時に同衾^{どうきん}してくれた彼女に、「好きだったのか」と囁やいてみたら「用心のため見張っていたのよ」と大声でやられた。自信喪失した。また、その病院へ、うっかり運ば

れないようにと、次回のために、私は地域外へと転居した。

求めよ、さらば与えられん。といった言葉が残っているが、どうも、あれは昔のことらしい。

私だって Taste や Devotion で死を追掛けているのでもなければ、看護婦に寝て貰いたいからと、それを願っているのでもない。何もかも信ぜられなくなつて、どうしようもなく、そうした感受性をもつ自分を消滅させたいと、ついガス会社をメートルをあげて儲けさせたり、睡眠薬をかためて売ってくれる薬屋に、その売上げ増加の協力をしたにすぎない。だが、それなのに、唯一の真実とも思われる死それ自体に対しても、あまり繰返して、すげなく扱われ、返品ばかりされ通すと、これまた信ぜられなくなつて、ただ、そこに醸しだされるものは、絶望の靄もやでしかなくなる。虚しさなんて、そんな漠然とした空間みたいなものではなく、亜硫酸ガスが充満したような、泪がポロポロ出る息苦しさあえに喘あえいでしまう。ひどいものである。

だが死ぬない限りは、生きていなくてはならない。生きていけるのには、何か要る。何かをやらねばならぬ。

それは、やはり堂々めぐりになるが〈真実〉といったものの追及になつてしまう。他に、それしかない。

考えてみれば、これを追いかけ索め^{もと}まわし、そして、あげくのはてが失望しては、自己整理ばかりを、性^{まで}こりもなく繰返し、誰かに見つけられては病院へ担ぎこまれてきたのだ。だから、いつ迄もゼミナールの繰返しをしていても、きりがないし、もう世俗の大人みたいに達観すると言うか、超越してしまうべきだろうとは、自分でも思う。だが、どうしても私は、それに取って換われるものが何もない。そりゃ人間の一生というものは、どう考えたって、莫迦々々しいくらい、たいしたことはない。

はたで何んと言おうと、当人の立場になつてみれば、いかに無駄なもので、徒勞の生涯であるかということも、己惚れや自己満足を引けば、答はでてくる。おそらく自分だけでなく、誰しも自己追求してみれば同じことだろうとは考える。といって、毎日、いらいらするからと、睡眠薬ばかりは嚙^のんではいられもしない。

だから Truth というものが、索めても、なかなか与えて貰えないものならば、せめてディスカウントして、Sincerity つまり〈真実〉というものを見つけないと、私は思うようになった。なりゆきである。

死ねないし、生きていねばならぬし、その為には何かをせねばと、段々自分自身に切羽詰ってきたのだろう。

そこで私が、必死になつて取り縋^{つくろ}ったのが〈信長殺しは、光秀〉という、あまねく知れわたった一つの事実への挑戦だった。やってみようと考えた。

もちろん、これは賭けかも知れない。しかし三百八十五年もの間に、定説とされ固まってしまっている具象に、そこに〈真実〉を見つけ、〈光秀は信長殺し〉でないと例証をひきだす事ができたとなると、それは賭けとしても無謀すぎる張り目だとばかりは言えまい。

なにしろもしものである。これ一筋に打ちこんで、その結果〈信長殺しは、光秀でない。他のXかYらしい〉と解明できたら、四世紀間に、それは私が唯一人であるという自己満足と、何度も死に損いながらまだ生き続けてきた自分というものの、これは〈生きていたあかし〉になるのではなからうかと、そんな具合に考えるようになった。

ところが思いついたからと言って、すぐに、どうなるものでもなかった。

初めは一年か二年で、なんとか突破口がひらけそうな気がした。自信過剰だった。とても、そんな、なまやさしいものではなかった。それは私は世間的には愚直で、あれもこれもと出来る方でもない。だから〈信長殺し〉の真因を追いかけ廻すために、他のものを書くのをやめた。唯ひたむきに私なりの〈真実〉を追った。ところが五年、十年、十五年とたつてしまった。ようやく曲りなりにも、〈信長殺しは光秀でない〉と解明できたときには、それを発表したいにも、二十年間筆をたっていた私は忘れられていた。仕方なく今の新しい筆名を一昨年つくった。この、私としては半生をかけて追いこんできた〈信長殺し〉の鍵をとく、最後のしめくくり、またマカオまできている。

振返ってみると、〈信長公記〉を自分で原稿用紙に転写して解説にかかってからの二十二年

の歳月は長かった。当時の武將、武者約三千を繁雜を免れるために、單語用のカードに記入分けした結果が、出身地と姓との結びに関連しているのが明白になつてきてへ八切姓の方則となり、あまり知られていないが、当時は著名だった人々の物語がへ八切武者シリーズになり、戦国期も源平期も、外来系の仏徒と、原住系のみなものと神徒の宗教闘争だったと解明できたのがへ八切裏がえ史である。

だが、それらのものは、みな、この副産物にすぎない。

これが上梓される日、すべては、もう終つてもよい。なにしろ、私は疲れきつた。すべてに見放され、すべてを放り出して、ばかりの一つの覚えでこれに一生を賭けてしまった。もし、この後、何年かまだ私が生きていたら、それは情性で仕事の続きに溺れているのか、それとも、また死に損つて生き恥をさらしているだけだろう。

虚実

光秀の実体は知られていない。講談では、「明智十兵衛は浪々の生活をしていたから、ある日客を招いたが、そのもてなしに、はたと困った。ところが手拭を姐さん冠^{かぶ}りした妻女が、いそいそと酒や肴を見つくるつて出してくれて、それで客に対し十兵衛は恥をかかずに済んだ。が、さて、客の帰ったあとで、『今日の食事にも事かく吾が家の暮しに、よくも錢の調達

ができたものよな』と十兵衛が不審がれば、妻女は、無言のまま畏かしこまつて、冠つていた手拭をぱらりと取った。それを見た途端、十兵衛は思わず『ウウン』と唸り『そちや、己が黒髪を、女ごの命と知っていて切ったのか。それを売って錢に換え、この十兵衛のため、客のもてなしをしてくれたのか……』と泪ぐめば、

『いとしきお前さまが為ならば、髪の毛など切り売りするも、いとやすきこと……夫婦の仲じゃありませんかいな』と妻女は首をふり、にっこり笑つてみせた。

『済まぬ。きつと立身して、そなたを仕合せにしてみよう。なあ、それまで待ちや』と十兵衛は、己れの妻女の手をとつて感謝する』という、仕組みになっている。つまり人間の感情の中の底辺ともいうべき人情話で、ホロリとするものを意識的にかきたてようとする俗受けを狙つた趣向で、そして、「かく貧窮の中にて浪々していました十兵衛をば、織田信長公が召し出され、とりあえず五百貫にて奉公させましたところ、妻女がよく出来ました方ですから、貧しいながらも、こざっぱりとした身仕度で登城させますし、朋輩衆が家へきても、これも心よく接待する。だから段々出世して、ついには近江坂本二十万石から、丹波亀山五十万石にまで立身しましたなれど、時に天魔に魅入られましたか。その大恩ある信長公を討ち奉り、これが世にいう『明智の三日天下』たちまち日ならずして、太閤さまに攻め滅され、自分は、小栗栖村おぐらすの百姓長兵衛に首をとられてしまう羽目になるという、因果応報。天は正しきを助け悪は必らず滅びるという物語」となるのである。

——この講談が、今日の光秀に対する常識になっている。勿論、虚像である。実際には、信長と光秀が初めに正式に逢っているのは、永禄十一年七月二十七日であるが、〈細川家記〉によって、すこし詳しく引用すれば、

「明智光秀は、その重臣の溝尾庄兵衛、三宅藤兵衛ら二十余騎をもつて七月十六日に、朝倉の一乗谷から出てきた足利義昭に供奉^{ぐぶ}させ、穴間の谷から若子橋をこえ仏ヶ原のところでは、明智光秀は自分から五百余の私兵を率いて待ち、ここから美濃の立政寺へ二十五日に赴き、二十七日に信長と対面」とある。

いくら妻女がロングロング・ヘヤアであつたとしても又、女の髪の毛は象をも繋ぐといったところでアラジンの魔法のランプではあるまいし、六百名に近い家来が、毛髪の切り売りぐらいで、賄^{まかな}えるものではないと想う。

一人平均五万円給与とみても、六百名では現在なら、人件費として三千万円の計上である。年間三億六千万円の俸給を出すためには、企業収益は年間三十億は必要である。そうなると、当今なら五百億ぐらいの売上げのある会社でないと、このバランス・シートは保てない。まあ話半分とみて、光秀の率いている私兵の半分が、よせ集めの臨時雇か、野次馬的な者とみて、これを除外したとしても、江戸期に於ては十万石。(一萬石で百人出兵の定法だった豊臣時代でも、これは五万石以上の実力であり、格式である) しかも当時、牢人の光秀には所領といふべきものはない。

つまり土地からの「作毛」である収穫物の米麦で、これは賄っていたのではない。

そこで、この記述によると、光秀は貨幣で給与を払っていた事になる。だから牢人とはいえ、えらい金満家だったということになる。しかしである。〈細川家記〉では、なお、この時代たるや、「明智光秀は大砲の妙術を心得え、朝倉家にて、五百貫の禄をえていたが、細川藤孝が越前に滞在していたとき、足利將軍家の衰微をなげき、深く交り互いに談合した。その後、義昭から直接に、光秀に対して、織田へ頼れるようにと依頼した。ところが、鞍谷某に密告されて、光秀は牢人させられた」

という時点が、これに当たる。つまり、「一貫一石」という換算でゆけば、五百石どころから、光秀は扶持離れた状態である。それでは全然計算が合わない。まったく矛盾しきっている。それに当時の五百貫取りというのは、鎧冑がいちゅうをつけ馬にのり、左右に護衛のための脇武者をはべらせて出撃する一人前の將校の最下位のことである。家来が二人と六百人では、違いが甚しいと思う。

それに（山内一豊の講談）で、間違つて伝えられているが、この時代は、女房が臍へそくりで金を払ったからといって、馬にのれたり、勝手に旗指物など、つけられるものではない。身分によって、初めて馬のりになれたり、許可があつて旗指物は背に立てられたのである。これは戦前、九段の軍装店へ行けば、銭さえ出せば將校の肩章でも軍帽でも売っていたが、それを買って付けたからといって、自分勝手に兵士が將校に昇進できなかったのと、まったく

同じことで、これでは、光秀の話も辻つまが合わない。

さらに「細川家記」は、あく迄も、

「永禄十一年十月九日。光秀は岐阜城へ赴き信長に逢う。信長喜んで、これに朝倉家同様に、五百貫の扶持を与えて召抱う」とある。しかし、これに對して、（それでは光秀の当時の勢力からみて、なんぼなんでも、五百貫では安かろう）というのでもあろうか。悪書とよばれている、「明智軍記」というのは、禄高を修正して、約十倍にして、

「猪子兵助の推挙により、美濃安八郡で、四千二百貫の關所けっしょの地を与えられた」とする。

だが、この本は、当時の講談本以外の何物でもないから、あまり信用できない。

もっと、ひどいのには、この他、古書では、「校合こうごう雜記」というのがある。これでは、「光秀は、もと細川藤孝の徒歩かち武者で、のち細川家よりでて信長公に仕え、その当座も徒歩武者の身分であったが、やがて信長の氣に入られ、知行を増やされ、疲れ馬一疋にもれる身分と出世し、信長が近江を手に入れると、坂本城を築いて、これを光秀に預けた」となっている。ところが坂本城というのは信長が築いたものではない。

これは森蘭丸の父の三左が籠城して討死した近江宇佐山の志賀城の北東四キロの戸津ヶ浜に、光秀が自力で建築したものである。

志賀城を信長から貰って一時居住したことは、

「元龜二年記」という史料に出ているそうだが、その翌年の正月には、つまり、

《兼見卿記》^{かねみ}の元龜三年正月六日の条に、

「明十於坂本、而普請也」と出ている。

《年代記抄節》によると、「前年十二月より起工」とも出ている。そして、

《兼見卿記》の元龜三年十二月二十四日に、「坂本城の天主作事工事以外は、あらかた落成し、その結構壮美なるには眼を愕かす」

と出ている。もし信長が建ててやるのなら、戦時目的であるから、きっと実用一点ばりの筈である。しかも悠長に一年余もかける訳はない。これは志賀城の古い石畳も利用しただろうが、明智光秀が、自腹をきって身銭で建てたものである。こんな判りきった事でさえ、三百八十五年後になると、すっかり間違えられてしまい、

「信長から坂本城を貰った」と言われている。

まあ時日の距り^{へだた}が遠いから、これは止むを得ないが、その当時の《校合雜記》が誤記しているのは、あきらかに作為である。（明智を細川家の下風にあつたもの）として世に宣伝した^い為の、これは意識的にばらまかれた（ある種の目的）を明確に、露骨に提示した、当時の、今いうところの、「怪文書」に他ならないと考えられもする。

さて、このすでに二年前の時点において、

《言繼卿記》^{ときつぐ}によると、

元龜元年二月三十日（大陰曆）の条に、

「信長、岐阜城より上洛し、明智光秀邸を宿所となして泊り、三月一日に禁裏へ伺候」
ある。

姉川合戦の後でも、七月四日に上洛し、七日まで、信長は近臣数百名と共に、当時はホテルはなかったから、ゆつくりと明智邸に滞在している。

五百貫どりや四千九百貫どりの身分で、まさか、何百人も収容できる大邸宅を、いくら當時はギルド制で大工の手間代が安かったにしろ建てられるものではない。それに、泊めるのに、貸し蒲団屋は当時なかったらうと想像される。つまり光秀は豪勢だったのである。そして、「信用とは、金である」と今でも言うが、当時とて、それは同じだったのだろう。

光秀が初めから金持ちで、京では大邸宅を構え、私兵も相当に抱えていて、信用ができたからこそ、信長は彼と交際し、やがて自分の幕下へ引きこんだのでは、あるまいか。

それが立証できるのは、〈原本信長記〉によれば、秀吉が、五万貫の江州長浜城主に登用されるより、既に一年有半前に、

別説である〈吉田文書〉によれば、もう明白に二年前に、

「『滋賀郡の内にて扶持を与う地侍の進藤らは、光秀の寄騎よりきたるべきこと」と、佐久間信盛への信長さまの朱印状の中に、記載これあり」とそれらの資料にはある。

つまり滋賀郡一帯は既に光秀領となっている。明智光秀は、秀吉よりも先に、もう一国一

城の主だったのである。

つまり講談本や俗説では、貧窮しきっていたか。又は、せいぜい五百貫ぐらいの乗馬将校の最低、旧陸軍なら、せいぜい中尉止まりであつたと言われ、それゆえ出世したいばかりに努力をしたはよいが、ついに慾を出しすぎ信長殺しをしたのだと、その謀叛説を説明する。

しかし、事実は、まったく違うようである。

彼は信長に逢う前から、極めて富裕だったからこそ、永禄十三年つまり元亀元年正月二十三日に、織田信長と十五代將軍の足利義昭の間に取換された文書。この内容は、きわめて重要なもので、

「一、諸国へ將軍家として内書を出す時は、信長に仰せ聞かされ相談してくれたら、信長も、それに添状をつけて出すから、むやみに勝手に、内書の乱発はしないほしい。

一、これまでの將軍家の御下知として、勝手に出されたものは一応破棄して白紙に戻し、これは考え直してくれること。

一、公儀である足利義昭に対し忠義を尽した輩に、褒美や恩賞を与えるのに、しかるべき土地がなければ、言ってさえ下さつたら信長の領分から、差上げも致しまする。

一、天下の政治を信長に一任されたからには、誰彼の区別はせず、また一々將軍家の意向を聞かなくとも、信長が、これを成敗する。つまり思い通りにやらせて頂きたいものである。

一、天下を安穩にするためには、禁中の諸公卿の動きに対して油断をされ、これに乗じられたり煽動される、ような事があつてはならないと、「ご留意下されたい」というものであるが、その書面に光秀の地位は明白にされている。

この、五カ条の通達に当たって、足利義昭の墨印が頭書にあつて、末文に「天下布武」の信長の朱印があるが、双方の代理人として、

織田信長方は、日乗となつていて、足利義昭側代理人は光秀。しかも、実物は、

〈成實堂文庫〉にあるが、信長の朱印の上部において、

「明智十兵衛尉、殿」と敬語がついている。

つまり形式的であつたとしても、この時点に於ては、光秀は信長から公文書に於ては、敬称をつけて扱われる上位、又は対等の地位にあつたことの例証である。

なにしろ（地位）とは、力であり、そして金である。

しかし美濃の明智城を出てから流浪した光秀が、一時にせよ朝倉義景に仕えたことは、〈高柳光寿氏著・明智光秀〉の一四頁にも、「光秀が朝倉に仕えたと思われる良質の史料は、五十嵐氏所蔵の『古案』という古文書集の中にある」と出ている。だが名の通つた家来としては、他の史料には、現れていないという。

そんな、名もなく貧しき一武者にすぎなかつた明智光秀が、何故一躍、そんな大金持にな

ってしまったのか、この不可思議さえ説明できない儘に、他の史家は見ぬふりをして逃げてしまひ、高柳氏のみが摘出して引例しているが、その謎はとけていない。しかし、これが後の「信長殺し」のきめ手にもされる理由で問題である。一つの鍵である。

さて牢人した途端に何百と召抱えた家来の中の溝尾庄兵衛や三宅藤兵衛は、小栗栖村で光秀が倒れるまで、陰日向なくつき添っている。世にも得がたき人材で、これは決して虚妄の幻の軍隊などではなかつた信実である。

二 君

永禄十一年十月十八日。織田信長に擁せられて上洛した足利義昭は、十五代足利將軍の宣下をうけた。だが室町御所以来の奉公衆の細川藤賢、上野信恵、一色藤長、細川藤孝、三淵藤英、上野秀政、和田惟政といった連中が頑張っていたから、

「公卿補任記」などをみると、信長を斯波管領家の跡目に推す内書には、

「なほ藤孝、惟政に申す可きなり」と（申次）^{もうしつぎ}と当時よばれた最高位の、官房長官名には、光秀などは、まだ入っていない。

骨折って織田家に橋渡しをしたとはいへ、金の力での上ってきた光秀は、歴々の譜代の奉公衆に比べれば、まだ、まったくの新参なのである。

翌年正月五日に、三好三人衆や美濃の殘党に、義昭が本圀寺で囲まれたとき、光秀も防戦したことが、

《御湯殿上日記》に出てくる位の身分なのである。

ところが三年後の元龜二年七月五日になると、

《曇華院文書》^{どげいんもんじょう}に、はつきりと、

「同院の領地である山城国の大住の莊に関する信長よりの、室町御所への抗議書の名宛人は、上野秀政、明智光秀」となって現れてくる。

つまり、この頃になって光秀は、その財力にものを言わせて、足利義昭の申次衆として、上野と同格にまで昇進しているのである。

翌年九月二十四日には、足利幕府奉公衆の一員として、明智光秀は兵千を率いて、いまの大坂の高槻城へ入ったと、その出陣^{しゅん}ぶりが、《言繼卿記》^{ことつぐ}には出ている。なお、

《年代記抄節》の同年四月の条には、これもはつきりと、「河内出兵の織田方へ加勢のため出陣した公方衆^{くほうしゅ}の一人」として光秀の名がみえている。

ところである。

《毛利家文書》に入っている元龜元年五月四日付の一色藤長から波多野秀治宛書状には、「朝倉征伐に出陣した信長は、秀吉、光秀を金ヶ崎に残して引揚げてきた」と出ている。

そして、同年九月の志賀山の宇佐城が落ちたとき、光秀は、柴田勝家と共に、京の二条城

防衛に二十一日夜、摂津から帰洛している。もちろん、この時は、十五代將軍家の足利義昭も信長に合力して出陣している。

高柳光寿氏の〈明智光秀〉では、この時点では「光秀は義昭と信長の双方から扶持を貰って、二君に仕えていたもの」と推定されている。江戸中期以降、「貞婦は二夫にまみえず、忠臣は二君に仕えず」という言葉が大陸からもちこまれ、そういう觀念からゆくと判らないが、私はこれを問屋の店員が百貨店の売場に勤務しているような出向社員と考えたい。なにしろ足利將軍に仕えていれば直臣じきであって、信長とも同輩の立場で居られる。それが信長の臣となつては陪臣ばいしんに落ちてしまう。この差違は、江戸期に入っても、河内山宗俊のせりふではないが「こうみえたつて、お直参じきだぜ」といつて雲州松江侯の家老を堂々と、玄関先で脅かせる位の箔があつたのである。

さて、信長は、近畿地方をば手馴なずけるため、いまの大阪西成区に当たる当時の摂津中島城主へ、於市御前おいちごぜんの妹に当る於犬おいぬを嫁がせていた。

この男は、初めは喜んで信長の字を名のり「細川信良」といつていたが、やはり將軍の直臣がよいとみえ、いつか義昭側になり、右京太夫の官位を貰うと、昭の字を頂いて「細川昭元」と改名してしまった。

これでは頼りにならないと、信長が目をつけ秘かに身代りにスカウトしようと、手心を加えていたのが、光秀ではなかつたらうか。と私は考えたい。

公然と、光秀が信長の為に奉公したのは、このち天正元年二月に足利義昭が信長に宣戦布告し、西近江守護代の三井寺の光浄院せんけい遯慶に兵をあげさせた時である。

〈原本信長記〉によれば、二月二十四日に石山の砦を攻め、二十六日には陥落させ、二十九日には今堅田を、明智光秀、柴田勝家、丹羽長秀、蜂屋頼隆の四軍に攻撃させたところ、光秀の攻め口から破って、ついに光浄院を降服させたとある。

この光浄院が、のちの山岡玉林房景之かげゆきであり、この長子の山岡景隆が、天正十年六月二日の午後四時に、瀬田の城主として、光秀が安土へ渡れぬようにと、瀬田の大橋を焼き払ってしまう男なのである。

簡単に考えると「天正元年の仇を十年後にうった」ということになるが、背後関係を調べると、そんな、なまやさしいものではない。これは後の話だが、いったい光秀という男は、どんな人間だったのだろうか。現代でも、頭が良いということと、賢いというのは違うが、どうも彼も、頭脳の回転は早かったが世俗的には、あまり利口だったとは考えられない。〈多聞院日記〉の天正二年の記載に、

「大和多聞城へ入った光秀が、同じ奈良の大乗院じんけん尋憲に命じて、寺宝になっていた法性五郎の長太刀の差出しを命じた。見せてほしいという指図だが、取り上げられるものと覚悟して出したところ、後になって礼をいって返してよこした。意外さに戻された側はびっくり仰天した」とある。

つまり、国家権力を振舞わせる立場にある者としては、愚直な振舞いであると呆れてしまったというのである。

正直というのは他人に利用価値のあるモラルである。

だから光秀は、死後ずうっと、利用されっぱなしの儘である。「正直ものは損をする」という江戸期の言葉は、光秀から起きたような気がしてならないこともある。なにしろ、その為、どこを探しても「信長殺しは光秀ではない」に役立つようなものは見つかりはしないのだ。唯、そんな時、ふと思い出てきては、おおいに元気づけをしてくれるのは、昔きいたことのあるモラエスが洩らしたという言葉である。だから本国から、その全集をとりよせて貰った。英文の方も揃えてみた。だが日本の全集だと、書簡や日記の類まで再録されているが、あちらでは、そこまで丹念には集めてはいない。たまたまポルトガル駐日大使館に、文学の好きな若い参事官がきていたから、本国へ、いろいろ照会して貰った。私も四国へ一月ほど行って調べるだけは調べに回ってみた。解明にかかって十年目ぐらいだから、昭和三十年頃のことであろう。

それから四年ほどして、戦時中、東洋堂で刊行されていた「ヘリシタン研究」の三集が、米軍爆撃で消滅していたのを、吉川弘文館から、改めて再刊される事になった。

その中の「岡田章雄・布教機関の分布について」という研究論文をみると「天正十六年（1

588) フロイス報告書」とへヴァリニヤーノ目録」並びにへ天正九年のガスパル・クエリヨ書簡」を引例して、その一二八頁に、

「安土のセミナリヨ神学校建築に使つて残つた木材を、オルガンチノが京へ運び四条の坊門の姥柳町うばやなぎつまり現在の蛸薬師通り室町西入るの地点に、三階建の礼拝堂と住居をつくつた。そして、この建物は四条西洞院にあつた本能寺とは、一町とは離れていなかったら、1582年つまり天正十年六月二日の暴動のときは、もうすこしで類焼の厄にあうところであつたと、当時の、

「真ド・チリナベル・ガ・デ・イラの教えの会堂」とよばれていた礼拝堂のことを説明している個所が見つかった。

この建物は、へ狩野元秀の洛中洛外名所図扇面画」にもものこっている。だから真実あつたものと断定できる。疑いを挿はさむ余地はない。なお、

へ天正十一年ヴァリニヤーノ摘要録」によれば、

「ここにはポルトガル司祭パードレ一名、使僧イルマン一名が常駐している他に、神学校寄宿の屯所コレジョとして日本人神学生十一、二名も宿泊していた」と明記もされている。

つまり、本能寺の変のあつたとき、信長が死んだ現場から一町以内の地点に、三階建ての礼拝堂があつて、そこにポルトガル人二名と、十余名の日本人神学生が寝泊りしていたという事実である。

しかも危うく類焼しかけた程だったから、いくら六月二日の夜明けから午前八時前近くまでの椿事ちんじとはいえ、彼らは朝寝などはしていなかったろうということ。しかも、この時代に、城は別にして三階建ては珍らしいから、彼らは、高見の見物というか、見晴しのきく所から、つぶさに実状を観察しているに違いないという結論も、これから引き出せない事はない。

と言うことは、取りも直さず、本能寺事件に対して、はつきりした目撃者がいたというへ真実マコトになってくる。

そして、十余名の日本人神学生と一人の使僧の方は、其後の足取りはつかめないが、ポルトガル人の司祭の方は、マカオへ戻っている。これはその翌年の、

へ1583年に於ける日本プロビンシヤ及び、その統括する事項のへアレッサンドロ・ヴァリニヤーノ報告書にも出ているし、それから九年後の、

へ1592年11月現在・ゼズス教会の日本管区に於ける教堂、駐在所の目録。並にそこに居住する師父パードレ、使僧イルマンの異動名簿に於ても、これは裏書きをされている。

こうなると、「信長殺しは誰なのか」を実地に見聞した目撃者が「マカオへ行つた」というT・Hのモラエス説は、全集本にはのつていなくても、そうまんざら頭ごなしに否定もできない。

なにしろ当時のマカオというのは、今のようカジノで知られたギャンブルの名所ではなく、そこは神の名による都市。つまり東洋一の神学校をもっていたからである。

へ1606年度耶蘇会（天主教派）年報」にも、「プラチエンカ出身のザカリヤス・カンピオニ司祭は、マカオ神学校の教職から日本へ渡海して病没したが、アレックスサンドロ・ヴァリニヤノ司祭は、日本からマカオへ戻って神学校を教え、そして一六〇〇年一月二日に昇天されるまで、彼はよき神の司牧者^{オフレイロス}であつた」

と、あるように、天文十二年（1543）八月二十五日。種ヶ島へポルトガル船がよつて、鉄砲を伝来させた信長の十一歳の頃から、マカオは、東洋における神の福音の都市であると共に、その十三年後からは、火薬という新兵器を輸出する死の商人の港とも変貌していた。

プロ

日本語の資料によると、この当時は、白人は、みな南蛮人。彼らのもつてきた神の教えは、当今の字なら「吉利支丹」その頃の当て字なら「貴理師端」と概念的に、一括されている。だが、どうもそんな単純なものではなかつたらしい。

というのは、鉄砲伝来の二十六年前の1517年に、ローマ法皇レオ十世が、サン・ピエトロ寺院の建築費用捻出のため、免罪符を売り出した。今でいえば宝くじである。しかし、くじの場合は、たとえ一等が一千万円であっても当たりは一枚きりで、殆んどは求めた人々の百円札が紙屑にされてしまう。また、これが、くじの非情さだが、博愛なる神の代理人で

ある法皇猊下に、そんな酷薄な冷たい仕打ちができればよう筈もない。よって一枚残らず、これごとくとく、神の思召しをもつて、みな当りにされた。

もともと *Indulgentia* 免罪という思想は、原始キリスト教会にもあった。善行さえつめば贖^{しよく}罪^{ざい}されて、天国へゆけるという保証だった。だからレオ十世猊下においては、命から二番目とも言われる金をだして、教会の建築基金にだすような善根を施す者は、もうそれだけの功德で、天国へゆけるものとみな認められたのである。いまの日本だって、社会事業に寄附金を出せば、紫綬褒章なんて勲章をくれる。昔は五円以上だと「赤十字なんとかの家」という木の標札をくれて、戦時中なんかは、町内にたいして恰好がいいからといって、どこでも献金して、そのお札を入口に掲げておいたものだ。昨今だって、白衣に青い袴をつけた人が「家内安全」といった御守りを「思召しです……」と、セールスにくる事だってある。成田山なんかになると、あすこは、こちらから車でいって「交通安全」のお札を、大きいのはいくら、小さいのはいくらと、言い値通りでみな頂いてくる。誰も値切りはしないところをみると、あれだって、神さまに認めて貰えそうな善行を、している人間ばかりが行くとは限らないから、やはり免罪符の購入に他ならないのであろう。

それに金なんてものは、なんでも購^{あがな}えるからこそ、それで、その流通価値があるにすぎない。もし、私がレオ十世であったとしても「愛は金では買えない」などと、尤^{もつと}もらしいような口調は使わず、もっぱら「金で仕合せが求められるなら、いいんじゃないですか。天国行

きの座席指定券は如何です」と、まさかダフ屋みたいには言わないが、せめて交通公社の宣伝部ぐらいのPR方法は、とったであろう。本当のことを言えば、私なんか、他人に売るより、もし頂けるものなら、なんとかして今からでも自分が是非とも一枚ほしいくらいである。

ところが、いつの時代にも、いやあな奴はいるものである。私も大学講師を何年もやってきたから言うのだが、頭の悪いくせに自己優位を誇示したがつて、愚にもつかぬことを、さも尤もらしく、いったりかいたりして、それで錢儲けをしたり人気とりをしようとする Professor という種属がいる。レオ十世の時代にもいた。Wittenberg 大学にいた Martin Luther という男だ。なにも命は一つしかないのだから、それに合せての切符なんだから免罪符だつて一枚でいい。だから、欲しければ、一枚かえばよし。いやなら買わなければならない。唯それだけの事なのに、その男たるやヴィッテンベルグ大僧院の門扉もんびに、九十五項目からなる抗議ポスターをはりつけた。まあケチ精神の現れであり、彼の売名行為であろう。

おかげでゲルマニヤ地区の免罪符大売捌元のテッツェルは、その営業を妨害された。

世に、これを「ルーテルの宗教改革」という。なぜかという評論家の彼をサクソニヤのフリードリッヒ公が早速、御用作家として匿かくまい、ときの国家主権のカール五世が、トルコ戦争後、また国内の新教徒を弾圧しだしたのに、対抗馬として利用したからである。つまり織田信長が生まれる五年前の享禄二年のシユバイエル国会において、フリードリッヒ公を初め、打倒カール五世の陰謀派は、こゝに抗議書プロテスタティオ (Protestatio) を提出した。今でいえば「国王不

信任案」の上程で、その退位要求である。

この時点から、新教徒はプロテスタントとよばれ、草案起草のルーテルみたいな男の職業はプロフェッサー。商売人はプロフェッショナル。身体で商売して身売りする女はプロステイスト（彼女らが営業的に使用しだしたゴム製品も、当初は彼の名をとってルーテルのサックと呼ばれる）。そして、ルーテルみたいに、ポスターなんか貼ることは、プロパガンダ。それを見て騒ぐ大衆のことをプロレタリアート。

そしてルーテルみたいに申込みをすることが、皮肉に意味を置きかえられて、今でいうプロポーズ。彼のように、文句をつけてダメ出しをしたがる人間を、後世、プロデュサー。彼みたいな爆発したらドカンと被害をうけるガスを、プロパンガス。なお危険を防ぐための野球の捕手の胸当などをプロテクター。また彼のような一か八かの商売をするのをプロモーター。今では興行師や香具師のことを言っている。

数えあげたら際限なくらいに、プロのつく言語が旧教のカトリック国で、憎悪と恨みをこめてつくられ相当数が今や日本語化して私たちも使用しているようだ。

さて、信長が十四歳の天文十六年には、シュマルカルデン同盟のプロ派の諸侯が、カール五世に宣戦布告した。もちろん、プロが弱いわけではない。相手のカール五世は敗れた。だから信長二十二歳で、美濃から嫁にきている奇蝶御前に内緒で、生駒将監の後家に、後の三位中将信忠になる奇妙丸をうませてしまった弘治元年。

アウグスブルク宗教会議でカール五世は、ルーテル側の布教プロパガンダを認めざるを得なくなった。もちろん、その間の（信長の義父の斎藤道三が二十九で、まだ油屋渡世をしていた）大永二年には、「騎士戦争」や「ミュンツァー暴動」もあった。

その二年後。毛利元就が多治比猿掛三百貫の身分から、一躍安芸吉田城主になった時点には、原始キリスト教の共産制を理想とする、中世紀コミュニストの大規模な農民戦争も勃発していた。

こういう情勢では神聖なるローマ法皇の旧教カトリの方は、俗界でいえば営業不振。従って、新しい販路拡張にせまられた。そうなれば、セールスマンによる新規開拓のパイオニア精神しかない。ヨーロッパでは、英国のヘンリー八世までが、カザリン妃を離婚して侍女のアン・ボレインと一緒にするため、カトリックをすてて、侍僧の克蘭マーをカンタベリーの大僧正にして、新教にはしり、「愛は何物よりも強し」なんて勅語をだしていたし、一般的にも「離婚できないカトリックなんて、亭主の乗り換えが出来ないじゃないの」と、きわめて進歩的な婦人たちにも不人気であった。だから、やむなく神のセールスマンであるカトリックの修道使たちは、南米、南阿、東洋と、当時の低開発国へ向って、トランクをぶら提げ、思い思いに散らばって行った。

だから織田信長が十五歳で那古屋城で結婚式をあげた天文十八年。まさかウエディング・

ケーキなど、お祝いにもつてきたとも思えぬが、フランシスコ・ザビエルが鹿児島へやってきた。そして、山口、豊後、京都と布教してまわって、やがてマカオへひきあげ、そこで神の途を教えつつ、そこで天文二十一年に昇天。死んでいる。

その五年後、マカオがポルトガル領になると、そこから日本へ、もちろん火薬商売もしてきたが、売れ残りの免罪符をさばくつもりか、ポルトガルのカトリックのゼズス会の宗教セールスマンが、どんどん入ってきた。

さて私は村上直次郎氏の多年の労作に文句をいうわけではないが、彼が〈長崎叢書・日本耶蘇会年報〉とか、〈異国叢書・耶蘇会日本通信史料〉といったタイトルで、南蛮史料を刊行するものだから（耶蘇教＝切支丹＝キリスト教）といった誤謬^{ごびゅう}を与え、そのため日本に於ける中学校高校に教科書に採用される〈世界史〉が一冊残らず、みな同じように間違いをしまっているが、〈Ignatius Loyola〉が海外布教のために1534年に創立した〈Company of Jesus, Jesuits〉は、これを「耶蘇会」と訳すのは誤りらしい。「耶蘇会」という日本語を当ててよいものは、1530年のルーテル派のヒランヒトンのかいた〈アウグスブルグの信仰告白〉による懺悔録を参照すれば、よく判ることだが、これはプロテスタントの新教のほうである。明らかにこれは困った誤訳である。

つまりフランシスコ・ザビエルによつて、日本列島へもたらされ、マカオをば宗教基地として、

（天正十一年（本能寺の変の翌年）アレッサンドロ・ヴァリニヤーノよりの、ポルトガル本国のエボラ大司教報告書）にも記載されているところの、「この日本列島において、神の御名は讃うべきかな。わが聖堂はすでに二百に近く、祈禱^{きとう}所程度のカザやコレジヨは、その数に加えず、されど、これとて二十余カ所に、その建物あり」

という宗教分野は、これは「耶蘇教」ではなく「天主教」のカトリックのほうである。

つまり「日本耶蘇教会」というのは、根本的な間違いで「日本天主教会」でなくては、すべてが混乱してしまうのである。即ち「耶蘇教」と区別されて呼ばれるべきプロテスタントの新教が東洋へ入ってきて、その布教活動をししたのは、これは三百年あとの十九世紀の清朝末期で、日本へ伝わったのは明治からである。

そこで村上直次郎博士及び、その門下生の記したものを引用するに当たっては、私は、この根本的な誤訳をさけるために、〈天主教〉という文字に改めて用いる。

さて、本能寺の変のおきる四年前。

マカオにとって、それは重大なことが起きた。

領主にして、その君主であるポルトガル国王のセバステヤン一世が、事もあるうに南アフリカへ攻めこんで、モロッコ人の騎馬隊に殺され、ついに敗戦してしまったのである。

だから、その二年後の天正八年の1580年8月12日に、当時マカオから日本へ赴任して

一年目のアレッサンドロ・ヴァリニヤーノ神父は、九州の口の津から、

「カスチリア人（西班牙）の原始会則派会派の修道者が、フィリッピン（当時は西領）からマカオへきています。吾々ポルトガル人の勢力圏内を荒しているのは、これは、きわめて不快を覚えます」

といった意味の書簡も本国へ送っている。マカオに当時の原文がある。これは、のちに彼がゴアから送った、

「聖にして偉大なるローマ法皇アレッサンドロ六世陛下は、新しく発見された世界の分配を、神の僕である宣教師になされましたが、西印度と東印度を境にして、スペインとポルトガルは境界線をしいてゐる筈です。それなのにポルトガルのセバステイアン一世陛下が戦死されたから、わが王国は、隣国スペインのフェリッペ国王の統治になりました。もはや自分たちの王様や政府をもたぬ哀れな亡国の民であるポルトガル人は、こうなつては、もはや優越と名誉を、すくなくらず奪われてしまったのでございます」

という一文を対照してみると、よく納得できる。

そもそも初代フィリッピン総督のミゲル・ローベス・デ・レガスビというのは、本能寺の変の勃発した天正十年から、遡って十五年前に、アグスチン派の修道者を伴ってきた。そして天正五年になると、フランシスコ派の修道者が、スペインから大西洋をわたってメキシコへゆき、そこから貿易風を利用。フィリッピンのマニラへ集つてきた。

そして本能寺の変の一年前の1581年には、初代ドミニコ会のドミンゴ・デ・サラサーが、

「ポルトガル人の天主教派を一掃しての日本占領のため」強力な修道士をあまた率いて、本国からやってきていたのだ。これは、その、

へ1581年・ガスパール・コエリ年譜」にもあるように、「日本列島は東洋一の有望地で、すでに信徒は十五万をこえ、天主堂が二百もあるのに、ポルトガル人がマカオからきているのは僅かで、日本人の助司祭のパードレ・イルマンを加えても八十余人で、とても手がまわりかねている」という実状に目をつけて、手薄を狙ってのつとりにきた、ものらしいと想像される。

疑惑

なにしろ私が、このマカオへきたのは、

「もしかしたら（信長殺し）は、このスペインのドミニコ教会の初代司教のサラサールの手の者か。日本を奪われまいと焦慮したポルトガルのマカオ司祭の内の、いずれかの謀略ではあるまいか」

といった疑念を、スチュワードス殺しと目されるカトリックの宣教師が、日本から脱出し

て、さっさと本国へ逃亡してしまった、あの時点から、偶発的に想いついたという事も確かである。

と言うのは、〈ヘヴァリニヤーノ書簡〉にも、

「マカオの司祭は三千エスクードに価する一修道院の許可を、渡来したカスチリヤ人のフランシスコ修道士たちに与えました。しかし彼らは、マカオより中国本土の方を、メキシコやフィリッピンのように、自分たちの手で征服したがつています」

というのが明白に書かれてあるからである。

いくら神の栄光が偉大であっても、その国自体を占領するのではないとは、布教活動がまるで違う筈である。それに当時、ポルトガルのセバステイアン一世が死ねば、まるまると、その国土が統治できたスペインである。その三年後に、また野心を起し、当時の日本の主権者の信長を倒せば、否応なく日本列島に君臨できると考えたとしても、これはすこしも訝おかしくない。

なおヴァリニヤーノは、スペインのカスチリヤ人の中国本土征服の野心しか、書き残していないが、あの広大な中国より、どう考えたって、こぢんまりした日本列島の方が、占領する足場としては手頃ではあるまいか。

そして「安土か京にいる織田信長一人さえ亡きものにすれば、この国は手軽く奪えるもの」
とでも、考えたのではなからうか。と想える。

また、このヴァリニヤーノ書簡を裏返しに判読すれば「先んずれば人を制す」のたとえで、「スペイン人に奪取されるくらいなら、まずポルトガル人がやろう」とも受取れるし、当時、印度を東西に分けて、その勢力を二分していたポルトガルとしては、ローマ法皇に対し、「スペインが中国本土を狙うのなら、吾々は、対抗上、まず日本列島を頂かねばなりません」と献言していたのかも知れない。

と、疑惑がもてるのは、ワイジ・タールド印度派密使の資格をもって、天正七年七月にマカオから、日本へ来朝したアレックスandro・ヴァリニヤーノは、翌天正八年十月に、豊後府内の教会堂に於て、スド・コンスルタ天主教の神父たちをあつめ、九州協議会をひらき、続いて安土の天主堂で、スエ・コンスルタ中央協議会。そして天正九年十二月には、長崎のトドス・サントス会堂で密議がもたれた。そして、これを最後にして正式の会合は姿を消し、翌天正十年の六月二日に、京都四条の三階建の天主堂から一町もない至近距離の本能寺で、いきなり突如として信長殺しは起きたのである。

もし当時の十字軍遠征用に考案されていた折畳み分解式のイサベラ砲を、この天主堂の三階へ運び上げていて、一階だての眼下の本能寺の客殿へ撃ちこむか、もし、それでは人目をひくものならば、その火薬を本能寺の境内へもちこんで導火させてしまえば、ドカンと一発、それで、これは容易にかたのつくことである。

詳しい状況は後述するが、本能寺は午前四時に包囲されたのに、突然、火を発したのが午

前七時すぎという、時間的のギャップと、前日までの大雨で湿度が低下していたのに、火勢が強くて、まだびしょ濡れの筈の本能寺の森の生木まで燃えつくし、民家にまで類焼した。

そして信長の焼死体が行方不明になってしまった位の強度の高熱状況からみても、木材や建具の燃焼温度では、火力の熱度が不審である。つまり今日の消防法規というA火災ではなく、これは化学出火のB火災の疑いがある。

当時の化学発火物といえば、文字通り「火薬」であるが、小銃などによって発射された程度のもものでは、これは炸薬だから、たいしたことはない。性能のつよい火薬による本能寺焼討ちとなれば、火裂弾コムバンドしかない。

もちろんこれは、皆目、日本側の史料にはない。だが考えられることである。

さて、当時のヴァリニヤーノ協議会草稿というのは〈Consulita〉の名目で、ローマのバチカン法王庁に〈Japsin 1-34・40-69〉の註がついてスペイン語とポルトガル語で現存している。

しかし、まさか神の書庫に納められているものに、今となつては殺人計画書など附記されている筈もあるまいと、考えられる。(……念のため七月末に私はローマへ見にゆく)

さて、ここに、もう一つ、訝しな事実がある。

ヴァリニヤーノは天正九年十二月の長崎会議のあと、翌年二月二十日。つまり本能寺事件

の起きる百日前に、九州の大友、大村、有馬の三侯の子息を伴って、秘かに日本脱出をしている。

これは信長を倒したあとの、日本列島のロボット君主に、この中の一人を、ローマ法皇グレゴリオ十三世に選ばせる為ではなからうか。昔から、「三つに一つ」とか「三位一体」というように、カトリックでは、ものを選ぶときに、同じようなものを三個ならべてその一つを、神の啓示にもとづいて採決する古教義が伝わっているからである。

ところがである。マカオへ彼がわたったとき、

「ポルトガル王統断絶によって、従来は委任統治形式であつたスペイン国王フェリッペ二世が、新たにポルトガル国王フェリッペ一世を名のつて、ここに改めて、二つの王を正式に継承した」

つまり二国が完全に合併した、という知らせが届いたのである。

だからポルトガルの努力を、一挙にもり返そうとしたヴァリニヤーノの計画は挫折した。しかし、当時は無線も航空便もない。そして、季節風をつかまえないと船も進めないから、日本列島へ指令をだして、計画変更を訓令する暇がなかったのではあるまいか。

かくて同年六月二日。本能寺の変。

そしてヴァリニヤーノは、ローマへゆく筈だったのに、急に、日本の異変によって禁足され、印度管区長に任命され、途中で雄図空しく足止めされてしまった。だから九州三侯の子

息たちは、日本語の通ずる彼と別れて、パードレのロドリゲスに伴われてヨーロッパへゆき、手土産の屏風などをプレゼントして歩いた。何をしに出かけたのか、今だに訪欧の目的は判らない。疑問とされている。

さて、さらに奇怪な現象が、ここに発生する。

本能寺にて信長が殺害されたという日本列島の政変が本国へ伝わった後、直ちに、新しくポルトガル王になったフェリッペ一世は、印度副王のドン・ドアルテ・デ・メチーゼスに対し、(スペインとポルトガルは今や合併し、一つの国になっているにも係らず)スペイン領のフィリッピンと、旧ポルトガル領のマカオの交通を、まったく、だしぬけに断固として、固く禁止させてしまった。

しかも、その上、印度副王は、突如として、マカオのカピタン・モール宛に対し、ビブリオテカヘマカオ政庁図書館所蔵

「陛下の御名により、特に許されしパードレ以外の者は、いかなる聖職者や修道者も、これが日本へ渡航することは、固く禁止する。支那人の司教と言えども、マカオに、いま居る宣教師は、一人と言えど、これを日本へ行かせてはならない。もし彼らの中で、既に日本へ赴いた者あると耳にしたら、陛下の御名によって余が命令するところであるから、如何なる方法をもつてしても、直ちに追いかけて引つ捕えて、これをマカオに送還せよ。本命令は、何等

の疑念故障を、これに挿まずして完全に履行することを命じ、その命令通りするよう通告する。尚本書は、フェリッペ一世陛下の御名に於いて認可され、陛下の御玉章を捺印されたものと、まったく同一効力を有するものである」

と発令をしている。もちろん表向きの理由は、いろいろの宗派の宣教師が日本へ入りこんでは混乱するからだと言うのである。

しかし、この当時フィリッピンのマニラへは、ドミニコ派のサラサルが初代司教として、スペインの国策として、本国から集団で来ていた。

もちろん日本列島に勢力をうえつけるためである。あまたの戦闘的な托鉢^{フトライ}修道士も率いていた。

だから、それゆえ当初は、マカオのゼズス教派のポルトガル人は邪魔をした。しかし国王の戦死によってスペイン統治下におかれていたから、本能寺の変の後では、もう反対の余地もなかった筈である。

だったらサラサルの率いる宣教師道士の一行は、堂々とマカオへ渡り、そこから日本へ行くべきである。それなのにサラサルを保護する立場のスペインの王様が、あべこべに、これを断固として禁止してしまったのである。

——何を危惧したのであろうか。

続いてマカオ在住者の禁足。日本へ行った者は、逮捕してでも、つれ戻せという緊急命令。

こんな不審な話があるだろうか。二百二十の大小の教会に、ポルトガル人の師父が数名で、あとは改宗した日本人の俄にわか助司祭。それも合計して八十名。これでは、あとの百四十の教会は、信者が集つても、それを司つて、アーメンを言う者もない。

つまり二千人の信徒に一人の宣教師では、手がたらないのは判りきつた話なのに、沢山日本へ渡航しては混乱するから、一人もやるなと言う、この弾圧は、まったく奇怪である。といわざるをえない。

しかも、こうした宗教上の問題ならば、(ローマ法皇のグレゴリオ十三世から、ゴアのレアルコンセ・ホデラストインジャス王立印度参事会をへて) マカオのゼズス教会の大司祭へ通達されるのが、当時としては順序というものである。

それなのに、この命令系統は無視され、まったく違う。「カピタン」というと、江戸期に入つて長崎の出島へきていたオランダ商船の船長を考へがちだが、信長の頃の「カピタン」とは、何十門かの青銅砲をつんだ軍艦の艦長で「マカオのカピタン」といえば、今日の「マカオ海軍総督」に当るものである。

(国王から印度副王。そして海軍総督) という伝達は、これは宗教問題というよりどうみても、明白な軍事命令としか受けとれぬ。

まるでマカオに一大異変でも発生したように、(フィリッピンからは渡航を厳禁し、マカオ在住者は一人も日本へやるな) という、この武力通達は、何に起因しているのだろうか。

私は、これを（本能寺の変）は、スペイン人であるフェリッペ国王は、前もって聞いていない寝耳の水のことなので「東洋の利権を失っては」と驚愕した。と考える。

そこで陛下は善後策をとるため、新法皇に連絡して帰国中のヴァリニヤーノを途中の印度に足止めさせた。

ついで、その部下として日本にあつて、京都四条坊門にある天主堂から本能寺を爆発させたのをみて、その場からマカオへ逃げ戻ってきたポルトガル人と日本人のパードレやイルマンを、他と接触させては厄介であると、監禁させた。そして、その秘密の洩れるのを警戒し、マニラに待機中のスペイン神父らの渡航を禁じた。もちろんマカオは非常警戒で、もはや天主教の大神祭などに委せてはおけぬから、モール海軍総督の兵力によつて、戒厳令をしいて、ポルトガル人の謀叛事件を、極力これを隠蔽しようとした。——といった具合にも解釈できるのである。

これに関してポルトガル系の史料はないが、マカオ及び日本への渡航を禁止されたフィリッピンのドミニコ派の宣教師が、同じスペイン人であるフェリッペ陛下へ送った陳情書は、今も残っている。天正十八年、つまり、これは本能寺の変から、八年目のものである。

へ1590年6月23日附・フィリッピンのマニラに於て、フランシスコ教派監督フライ・ペトロ・バフチスタより、陛下に奉つる上訴文」という書簡である。

「当地からマカオへ渡る途が絶えてしまつてから、もはや本国からくる宣教師もいなくなりました。ですから、すでに受洗させた信者も放りっぱなしの有様で、これでは新しい芽として育て、その徳行を増すための教理の伝道にもことかきます。なんとか本国の修道士たちが当地へ来てくれるよう、つまりマカオや日本へ入れるように理解を加えられ、どうか渡航禁止の軍令を解除して頂きたく、ここに神の御名により、切に懇願するものであります」

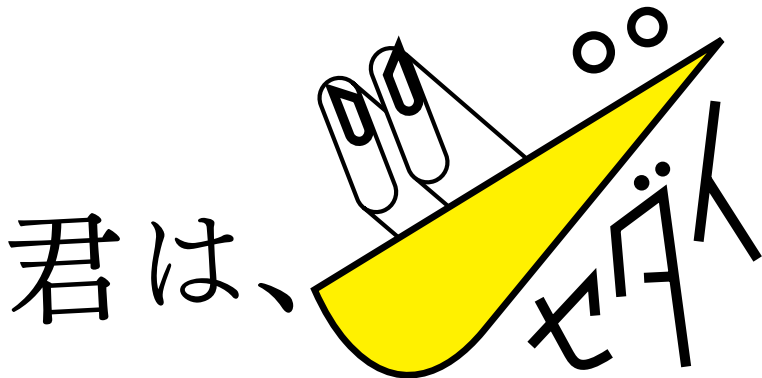
(Porez, Cartas y Relacione 収録)

この当時、スペイン船はマカオへ行つて、中国の生糸や絹布。そして日本から運んできた金銀や銅の地金を求め、メキシコやインドへ運んで巨利をしめていた。渡航禁止というのは、宣教師だけではなく、船舶自体の航行を遮断したのであるから、スペイン兼ポルトガル国王として、フェリッペ陛下の損害は、きわめて莫大なものだったろうと想像される。

それなのに天正十八年の時点ですえ、まだ禁止はとかれていない。つまり陛下は、極東貿易の巨利を、すっかり放擲ほうてきされているのである。スペインの国策が、本能寺の変を境にして、こんな変更を余儀なくされたのは、何故であろうか。これでは、マカオへ戻つていったのは、単なる目撃者ではなくて、殺害者自身ではなからうか。そんな疑問さえも、はつきり言つて、抱かざるを得ない。だから海をこえ、こうして私も、またマカオへきたのである。

——だが、いきなり、こうした発想をかいては、読まれる人は、とまどわれるかも知れな

い。そこで、これまでの経緯、つまり私が、ずうっと丹念に探しあつめて調べた信長殺しに、ここからは筆をばターンさせ、また戻さねばなるまい。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!